

# 柴崎熊野前遺跡Ⅱ

平成21年度県立高崎高等養護学校校舎棟等増築工事事業に伴う  
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2011

群 馬 県 教 育 委 員 会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

## 序

高崎市柴崎町に所在する群馬県立高崎高等養護学校は、群馬県教育委員会により平成8年度に群馬県内の知的障害児教育の充実を図るための新設事業が計画され、平成9年4月に開校しました。その建設に伴う埋蔵文化財を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施し、平成10年に報告書を刊行しました。

この度、近年の学生の増加に伴って一般教室や実習室の校舎棟等の増築工事が行われる運びとなり、その工事に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査を、平成22年度に実施いたしました。本報告書はこの発掘調査の成果についてまとめたものであります。

発掘調査の対象である柴崎熊野前遺跡は、井野川右岸の沖積地と微高地にかけて立地しています。平成8年度の発掘調査で、縄文時代・古墳時代・平安時代・中近世と他の時代にわたる多様な埋蔵文化財包蔵地であることが分かっており、今回の発掘調査でも、平安時代の竪穴住居と水田、中世から近世にかけての溝、江戸時代の復旧高の存在が判明し、時代の移り変わりとともに変移するこの地域の土地利用の様子が看取できました。

本遺跡の発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である群馬県教育委員会、及び高崎市教育委員会、高崎高等養護学校の方々から格別のご指導とご協力を賜りました。ここに、報告書を上梓するに際し、関係者の皆様に心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明する貴重な資料として、広く活用されることを願い序といたします。

平成23年1月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 須田 栄一

## 例 言

- 1 本書は平成21年度群馬県立高崎高等養護学校校舎棟等増築工事に伴う柴崎熊野前（しばさきくまのまえ）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡については、平成8年度に発掘調査を実施し、平成9年度に報告書を刊行しており、本書は2冊目にあたる。
- 3 遺跡所在地 群馬県高崎市柴崎町字熊野前1902,1904,1905,1909-2,1910-1字川田1833-5,1839-1,1839-2（くんまけん、たかさきし、しばさきまち、くまのまえ・かわだ（Kumanomae・kawada, Sibasaki-town, Takasaki-City, Gunma-Prefecture））
- 4 事業主体 群馬県教育委員会 事務局管理課
- 5 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 6 調査期間 平成22年6月1日～平成22年6月30日
- 7 調査体制 調査担当者 麻生敏隆（主席専門員）、小林 正（主任調査研究員）  
遺跡掘削工事請負 株式会社シン技術コンサル  
委託 地上測量：株式会社 測研
- 8 整理期間 平成22年10月1日～平成22年11月30日  
整理担当者：関 晴彦（主席専門員）保存処理：関邦一（補佐）遺物写真撮影：佐藤元彦（補佐）  
遺構所見：麻生敏隆（主席専門員）、小林 正（主任調査研究員）  
遺物観察：岩崎泰一（主席専門員）、大西雅広（主席専門員）、神谷佳明（主席専門員）、笹澤泰史（主任調査研究員）
- 9 出土遺物および遺構・遺物の図面・写真類は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 10 発掘調査および本書の作成にあたり、次の方々よりご協力・ご助言を得た。記して感謝の意を表したい。  
群馬県教育委員会 高崎市教育委員会 群馬県立高崎高等養護学校（敬称略）

## 凡 例

- 1 本書で使用した国家座標は、世界測地系によるものである。本調査の時点では、前回の報告との整合を図るために日本測地系の数値をそのままグリッドとして使用したが、整理段階で変更した。
- 2 各挿入図の方位は座標北を示す。（偏角 ° ' ''）
- 3 本書における遺構番号は算用数字で、調査時に付されたものをそのまま使用した。
- 4 遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞれにスケールを付すか、遺物番号に縮尺率を併記した。なお、写真の縮尺も同じである。  
遺構図 竪穴住居 1：60 住居竪 1：30 土坑 1：40・溝 1：100 その他は明記  
遺物図 土師器・須恵器・中世陶磁器 1：3、1：2 石製品 1：1、1：3 鉄製品 1：3
- 5 遺物番号は本文・挿入図・表・写真図版と一致する。
- 6 竪穴住居等の面積は、住居の周縁をプランメーター（タニタ プラニックス7）を用いて3回測定し、その平均値を記した。
- 7 計測値には次の略語を使用した。「口」→「口縁部径」、「胴」→「胴部最大径」、「底径」→「底部径」、「高さ」→「器高」
- 8 遺物の重量の計測にあたっては、6000gまでは1g単位の秤を使用して計測した。
- 9 各地図について、使用した原因類の名称については、その都度記載している。

# 目 次

序

例言

凡例

目次 (文章・挿図・表・写真)

抄録

第1章 調査の方法と経過	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の方法	1
第3節 発掘調査の経過	3
第4節 整理の方法と経過	4
第2章 遺跡の環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 地形と地質	5
第3節 歴史的環境	6
第4節 基本土層	9
第3章 遺構と遺物	10
第1節 遺跡の概要	10
第2節 検出された遺構と遺物	10
遺物観察表	27
第4章 まとめ	29
第1節 水田	29
第2節 復旧畠・穴	29

写真図版

奥付

## 図版目次

第1図 遺跡位置図 (国土地理院・5万分の1「高崎」)
第2図 グリッド設定図
第3図 井野川流域の地形分類図 (『群馬県史』通史編1より)
第4図 周辺遺跡図・全体 (国土地理院・2.5万分の1「高崎」)
第5図 周辺遺跡図・古墳 (国土地理院・2.5万分の1「高崎」)
第6図 周辺遺跡図・城館 (国土地理院・2.5万分の1「高崎」)
第7図 基本土層図
第8図 縄文土器・石器遺物図
第9図 平安時代遺構分布図
第10図 31・32・33号土坑、42号溝遺構図
第11図 4・5号竪穴住居遺構図①カマド
第12図 4・5号竪穴住居遺構図②カマド
第13図 4号竪穴住居遺物図①
第14図 4・5号竪穴住居遺物図②
第15図 平安時代遺物図
第16図 4区・5-a区As-B下水田遺構図
第17図 5-b区As-B下水田遺構図
第18図 中近世遺構分布図
第19図 38・39・40・41号溝遺構図・中世遺物図

第20図 As-A 2号復旧畠、復旧穴遺構図
第21図 29・30・31・32号溝遺構図
第22図 33・34・35・36・37号溝遺構図・近世遺物図

## 表目次

第1表 周辺遺跡一覧	第2表 古墳一覧
第3表 城館一覧	第4表 テブラー一覧
第5表 縄文土器・石器一覧	第6表 2区4号竪穴住居一覧
第7表 2区5号竪穴住居一覧	第8表 平安時代遺物一覧
第9表 中世遺物一覧	第10表 近世遺物一覧

## 写真図版目次

PL. 1	5-a区東壁土層 (西から)
	31号土坑セクション・全景 (西から)
	32号土坑セクション・全景 (南から)
	33号土坑セクション (南東から)
	42号溝セクション (東から)
	42号溝全景 (北から)
	4号竪穴住居セクションA-A' (南から)
	4号竪穴住居遺物出土状態 (西から)
PL. 2	4号竪穴住居1号カマドセクションC-C' (南から)
	4号竪穴住居1号カマド全景 (西から)
	4号竪穴住居2号カマドセクション1-1' (南から)
	4号竪穴住居2号カマド全景 (西から)
	4号竪穴住居1号カマド掘り方セクションC-C' (南から)
	4号竪穴住居1号・2号カマド掘り方全景 (西から)
	5号竪穴住居セクションL-L' (東から)
	4・5号竪穴住居掘り方全景 (南から)
PL. 3	4区As-B下水田全景 (北から)
	5-a区As-B下水田全景 (西から)
	5-b区As-B下水田近景 (東から)
	38・39・40・41号溝全景 (南から)
	5-b区As-A復旧2号畠・復旧穴群全景 (東から)
	5-b区As-A復旧2号高セクション (東から)
	5-b区As-A復旧2号畠・蹴跡 (東から)
	5-b区As-A復旧穴群・33号溝全景 (南東から)
PL. 4	29号溝全景 (西から)
	30・32号溝全景 (南から)
	34・35・36号溝全景 (南から)
	37号溝全景 (南東から)
	2区土置き場 (北西から)
	2区遺構確認作業 (南西から)
	2区遺構実測作業 (北から)
	3区人力による掘削 (北から)
PL. 5	4区人力による掘削 (南東から)
	5-a区遺構確認作業 (東から)
	5-b区遺構確認作業 (東から)
	5-b区As-A復旧2号高検出作業 (南から)
	縄文時代、平安時代、世出土遺物
PL. 6	平安時代、中近世出土遺物

抄 録	
書名ふりがな	しばさきくまのまえ いせき に
書 名	柴崎熊野前遺跡II
副書名	県立高崎高等養護学校校舎棟等増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	513
編著者名	麻生敏隆・岩崎泰一・大西雅広・神谷佳明・笹澤泰史・関晴彦
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20110120
作成法人ID	25001
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橋町下箱田 784-2
遺跡名ふりがな	しばさきくまのまえいせき
遺 跡 名	柴崎熊野前遺跡
所在地ふりがな	くんまけんたかさきしばさきまちおおあざ
遺跡所在地	群馬県高崎市柴崎町
市町村コード	10202
遺跡番号	1157
北緯（日本測地系）	361832
東経（日本測地系）	139346
北緯（世界測地系）	361843.319
東経（世界測地系）	1390334.520
調査期間	2010601-20100630
調査面積	950
調査原因	県立高崎高等養護学校校舎棟等増築工事
種 別	集落/その他
主な時代	縄文/平安/中・近世
遺跡概要	集落－平安－竪穴住居 2, 水田/中近世－土坑 3、溝 14 など
特記事項	平安時代の住居・土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・刀子、中近世の土坑・溝、江戸時代の復旧畠・復旧穴
概要	井野川の低地帯右岸に形成された高崎（井野川）泥流堆積面と河成段丘の後背湿地に位置し、標高は76～77mで、現在の河床からの高さは約3mである。平安時代は、東側の微高地に9世紀末の竪穴住居が存在し、西側には1108（天仁元）年の浅間山の火山活動で噴出したB軽石で埋没した水田が、中近世では、1783（天明三）年の浅間山の火山活動で噴出したA軽石の処理穴と復旧畠。

## 第1章 調査の方法と経過

### 第1節 発掘調査に至る経緯

1996（平成8）年度に群馬県教育委員会により、群馬県内の知的障害児教育の充実を図るため、前橋市と高崎市に高等養護学校の新設事業が計画された。県立高崎高等養護学校は高崎市柴崎町に設置されることとなり、1997（平成9）年4月に開校した。その建設に伴い、事前に1996（平成8）年4月から6月に財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施した。（『柴崎熊野前遺跡』1998参照）

近年の学生の増加に伴い、群馬県教育委員会では県立高崎高等養護学校での一般教室や実習室の校舎棟等を増築することを決定した。増設工事を進めるにあたり事前の埋蔵文化財発掘調査を実施することとなり、群馬県教育委員会事務局管理課と同教育委員会文化財保護課が協議し、2010（平成22）年5月13日に「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を取り交わして、その発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託することとなった。そして実施に関する協議を重ね、学校行事の影響と生徒の安全を最優先に考慮して「柴崎熊野前遺跡発掘調査に関わる安全管理計画書」を作成した。これを受けて、建設工事に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査が、同年6月の一か月間で実施される事となった。

柴崎熊野前遺跡は高崎市柴崎町に所在し、井野川右岸の沖積地の低地部と一部微高地にかけて立地する。前回の発掘調査で、縄文時代・古墳時代・平安時代・中近世などを中心とする周知の埋蔵文化財包蔵地であることが分かっている。

（群馬県文化財システム 遺跡番号高崎市O1157

<http://www2.wagamachi-guide.com/gunma/>）

### 第2節 発掘調査の方法

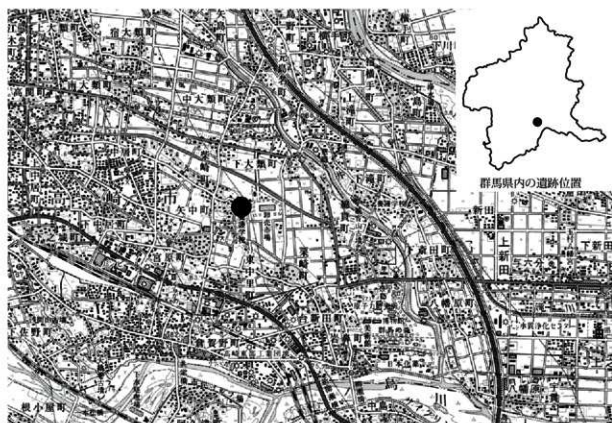
本遺跡での今回の校舎棟等増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査では、①普通教室棟（997.5㎡）と管理棟（276.1㎡）と渡り廊下（21.25㎡）、②実習棟（298.88㎡）、③・④東西の2ヶ所に設置される4m四方の消火用水設備（16㎡）の計4ヶ所が予定されていた。（ ）内は個々の面積で、当初の設計計画書では計画施設としての総面積は1,593.73㎡であるが、これは増築計画図の一覧表上の数値であり、発掘承諾書での表記の面積は1195㎡であり、実際には既に埋設されている電気・水道等のライフラインを避ける必要や、生徒等への安全対策への対処等で950㎡とさらに減少した。

また、今年度内に完成させる予定の建設工事の期間との関係で、埋蔵文化財の発掘作業の期間も6月の一ヶ月間と決定した。

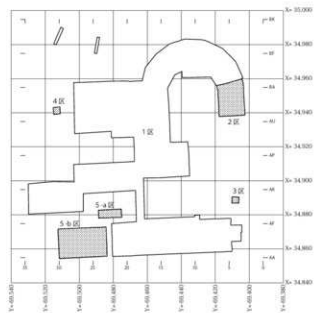
1996（平成8）年度の調査内容では、縄文時代・古墳時代・平安時代・中近世の各時代の遺構・遺物が検出されているので、今回もそれを目安とし、前回の発掘調査データによる遺構配置等を参照した。

調査区(グリッド)については、1996（平成8）年度が国家座標（2002年4月改正以前の日本測地系）の日本平面直角座標IX系を使用し、基準点を遺跡の東南の位置に基準点（AA-00）を設置し、座標を $X = +34500.0$ 、 $Y = -69100.0$ としており、この測量座標を踏襲した。この基点から国家座標に準じて西・北方向に座標を設定し、20m方眼で西へ8区画、北へ7区画の計56区画を設定した。4m四方の区画は東南を基点に北へはA～Yまでのアルファベット、西へは1～35までの数字を付与して各区画を区分した。この小区画を基にして、遺構図測量、遺物取り上げ、旧石器時代等の試掘調査を実施するときの基準として使用した。

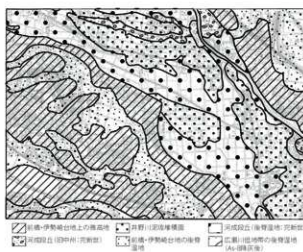
さらに、発掘調査における遺構番号は1996（平成8）年度からの継続とし、堅穴住居4、溝29、土坑31、畦4から付ける事となり、それ以外に新たに検出される種類の遺構については、新たに1から付ける事とした。ただし、畠については1としたが、復旧穴については1996（平成8）年度が「灰掻き穴」としていたために1から付番する事とした。



第1図 遺跡位置図(国土地理院・5万分の1「高崎」)



第2図 グリッド設定図



第3図 井野川流域の地形分類図(『群馬県史』通史編1より)

### 第3節 発掘調査の経過

本遺跡の調査は、2010（平成22）年6月1日から6月30日の1ヶ月という短い期間のために、5月末に準備を始め、2010（平成22）年6月1日から本格的に開始した。

発掘調査区域は、①普通教室棟・管理棟。渡り廊下、②実習棟、③東側消火用水設備、④西側消火用水設備の計4ヶ所であるが、それぞれが既成の建物を中心に東西南北の場所に離れているため、前回の発掘調査範囲すべてが繋がった1区とし、今回調査区は2区、3区、4区、5区とし、5区について東西方向で埋設されている電気・水道等のライフラインを避ける必要がある事から、南北に二分して、北側の管理棟部分を5-a区、南側の普通教室棟を5-b区とした。（第3図）

また、掘削土の置き場については、学校敷地内ですべて対処する方針で、2区は既成の実習棟の北東の駐車スペース、3区と4区はそれぞれ隣接する空き空間、5区は学校南東部のグラウンド隅とし、安全対策・汚れ防止・防塵対策のためにシート・移動式バリケード等を設置した。実際には掘削土量が予想上まわった事により、学校側との協議を通じて、掘削土置き場をさらに拡大した。

また、学校の授業内容に合わせて、追加の安全対策にも配慮した。

発掘調査は基本的に以下の調査方法で行われた。以下、これを各調査範囲毎に繰り返し実施した。

1. 掘削用の重機（バックホー）、あるいは人力による基本土層の第1層の表土の掘削を行う。同時に、安全対策のために安全フェンスや移動式バリケード等を設置した。
2. 第II層・第III層の中近世遺構確認・検出面、及び第IV層下位の平安時代確認・検出面について、重機と人力による遺構確認作業を行い、個々の調査を行う。（I・II・III面）
3. 遺構調査終了後、5-a区を中心に基本土層の第V層から下位の地層に対しての試掘を実施し、さらにその下位に存在する古墳時代以前の遺構の確認作業を行う。（VI面）

検出した遺構については平面、土層観察断面等の測量や写真撮影による記録を作成した。遺跡全体図や遺構個別図の測量は多くを委託したが、簡便なものは掘削作業

員によって作図を行った。また、広範囲に及ぶ遺構図については写真撮影による測量にて対応した。

遺跡の全景や遺構個別等の記録写真撮影には中型と小型カメラを併用して、基本的に6×7版白黒フィルムと35ミリのデジタルカメラデータ撮影を行った。遺構の全景の撮影にはモニタリングカメラ、ローリングタワー等を必要に応じて活用し、高所からの俯瞰写真を撮影した。

すべての発掘調査の記録作業が終了した時点で、それぞれの地区の埋め戻し作業を行い、当初の予定通りの6月30日までに撤収作業及び整地作業を終了して、県教育委員会と学校側の最終確認後に、工事側への引き渡しを行った。

#### 柴崎熊野前遺跡調査日誌

6月1日（火）学校への挨拶。調査区設定。安全柵設置。調査前及び作業風景写真撮影。重機による2区掘削開始。遺構確認作業。人力による3区掘削開始。

6月2日（水）重機による5-a区掘削開始。人力による4区掘削開始。2区作業継続、及び北東部トレンチ掘削開始。3区掘削作業継続。

6月3日（木）2区・3区・5-a区掘削作業継続。4号竪穴住居調査開始。29・30・31号溝掘削開始、断面Aライン写真撮影。

6月4日（金）4号竪穴住居精査継続。29・30・31号溝掘削、断面写真・実測。5-a区掘削作業継続。

6月5日（土）5-a区掘削作業継続。

6月7日（月）4号竪穴住居精査継続。2区溝全景写真撮影、測量。5-a区1面目及び2面目全景写真撮影、測量。東壁断面図測量。重機による5-b区掘削作業開始、1面目（As-A下）遺構確認。

6月8日（火）4号竪穴住居精査継続、土層断面写真撮影。カマド掘削作業開始。3区掘削作業継続。4区掘削作業終了、全景・南壁写真撮影。5-b区掘削作業開始、1面目（As-A下）遺構確認、復旧遺構（高・穴）断面写真撮影、測量。一部、2面目（As-B下）遺構確認開始。

6月9日（水）4号竪穴住居精査継続、土層断面測量。カマド土層断面写真撮影・測量。5号竪穴住居掘削作業開始。5-b区、1面目（As-A下）復旧遺構（高・穴）個別写真撮影・測量。2面目（As-B下）掘削作業継続。学校生徒及び教員見学。



6月10日(木) 4号竪穴住居掘削作業継続、平面写真撮影・測量。31号土坑平面写真撮影・測量。4区平面測量。5-b区、1面目(As-A下) 復旧遺構(高・穴) 写真撮影・測量。34号溝断面写真撮影・平面測量。2面目(As-B下) 掘削作業継続。生徒及び教員見学。

6月11日(金) 4号竪穴住居精査継続、ビット・土坑・2号貯蔵穴・2号カマド断面写真撮影・測量。31号土坑平面写真再撮影。盛り土が固いので重機による3区掘削。5-b区、1面目(As-A下) 溝掘削。2面目(As-B下) 掘削作業継続。

6月14日(月) 雨のため作業中止。図面・写真整理作業。

6月15日(火) 2区4・5号竪穴住居掘り方写真撮影・測量。2号カマド写真撮影・測量。2区全景写真撮影・測量。3区掘削。5-b区As-A下溝写真撮影・測量。

6月16日(水) 4号竪穴住居内2号土坑。2区西壁(基本層序) 写真撮影・測量。3区掘削作業継続。4区南壁断面測量。5-b区As-B混土層を包含する溝掘削、土層写真撮影・測量。As-B下水田・溝掘削。

6月17日(木) 33号土坑断面及び平面写真撮影・測量。42号溝断面及び平面写真撮影・測量。3区全景写真撮影・測量。南壁断面写真撮影・測量。人力による2区埋戻し開始。4区埋戻し終了。

6月18日(金) 5-b区北壁断面測量。土坑・畦断面写真撮影・測量。2区埋戻し終了。人力による3区埋戻し開始。重機による5-b区埋戻し開始。

6月21日(月) 3区・5-b区埋戻し継続。

6月22日(火) 3区埋戻し終了。5-b区埋戻し継続。

6月23日(水) 雨の影響で、埋戻し作業難渋する。

6月24日(木) 5-b区埋戻し継続。

6月25日(金) 5-b区埋戻し継続。

6月26日(土) 5-b区埋戻し継続。

6月28日(月) 5-b区埋戻し終了。鉄板撤去。安全柵撤去。埋藏物保管証、高崎警察署に提出。

6月29日(火) プレハブ撤去。

6月30日(水) 安全バリケード撤去。木の根等を産業廃棄物で処理。

## 第4節 整理の方法と経過

柴崎熊野前遺跡の整理作業は、2010(平成22)年の10月から11月までの2ヶ月間を整理期間とする計画に基づき、当事業団本部で実施した。

まず、土器や石器・石製品などの遺物については、洗浄・注記などの基礎整理を、既に発掘作業終了後の7月に実施し、9月中に洗浄・注記の確認、取り上げ番号などのチェックなどを行った。

本格的な整理業務を開始した10月からは遺構別・層位別・地点別・分類・区分けの後に接合・復元作業を開始し、実測個体の選び出しと実測・トレース作業を行った。さらに、図面類については原因全体の確認・台帳作成、掲載原図の選び出し及び挿入原稿とするため図の修正を行った。特に、発掘調査現場ではデジタルと手実測(アナログ)を併用し、主に平面をデジタル、断面を手実測で行っていたために、両者の整合作業に多くの時間を費やした。その後、デジタル機器によるトレース図作成を実施した。また、出土した遺物の図面上での位置の確認などを行った。そして、仕上がりの確認とともに、報告書作成の為のレイアウト作業、遺構や遺物、それに関連する資料の図版作成を行った。

写真関係では、現場で撮影した35ミリデジタルと6×7の個々の白黒写真については、出土状態など写真の種類などの確認、記録カード・台帳作成を行った。デジタルデータは保存性の問題を考え、ハードディスクとDVDの2種類で保存した。

遺物は報告書掲載の選び出し個体の写真撮影を行った。これらの作業がほぼ終了した時点で、レイアウトの作成、遺物・遺構・写真図版の作成を開始した。

同時に、報告書原稿については整理担当者が執筆したが、一部は発掘調査担当者や各時代・各遺構・遺物を専門分野とする職員らの助言・協力を得た。

報告書作成に関する作業はすべてデジタルデータで処理し、報告書作成の作業が終了し、印刷工程を経て刊行となった。

なお、出土遺物と記録類については、種々の活用に応えられるよう台帳に記録した上で、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

高崎市は関東平野の北西部に位置する群馬県の西部で、利根川上・中流域に広がる沖積平野から榛名山南東麓にかけて位置する。西端は長野県北軽井沢町、東端は埼玉県児玉郡上里町に接し、群馬県南西部をほぼ横断する形となる。

高崎市の周辺行政区は、東に前橋市、南東に佐波郡玉村町、南に藤岡市、西に安中市、北に渋川市である。

高崎市は、古くから新潟県や長野県への交通の要所として栄え、現在でも上越や信越への国道や高速道路網や、J R鉄道網等の中継点でもある。

近年、東毛広域幹線道路の建設が、ここ高崎地区から板倉間区で進められている。この東毛広域幹線道路はJ R高崎駅東口の栄町を起点に、伊勢崎市、太田市、館林市などを経て、邑楽郡板倉町に至る東毛地域を広域的かつ横断的に連絡する総延長58.61kmの主要幹線道路であり、J R高崎駅、国道17号上武国道、東北自動車道を連結するとともに、県央と東毛の各都市の交流・連携を高めるための重要な路線であり、周辺道路の渋滞緩和や沿線の産業立地、物流の効率化などに資する道路として期待されており、本道跡の北側約400mでも、暫定片側1車線ながら供用されている。そのため、流通の利便さから高崎市総合卸売市場をはじめとした工業団地や流通団地等が建設されてきており、従来の古い集落が存在する微高地と水田が広がる低地という景観も、都市化の波の中で大きく変わりつつある。

### 第2節 地形と地質

市内からは赤城山（最高峰は黒檜山：くろびさん 1827.6m）・榛名山（最高峰は掃部ヶ岳：かもんがたけ 1449m）・妙義山（最高峰は金洞山：こんどうさん 1113.8m）の上毛三山を望むことができ、特に榛名山の南東面は、大部分が市域に含まれる。

また市内には、利根川とその支流の烏（からす）川や確米（うすい）川など、利根川の支流となる河川が幾筋も流れている。市内倉測町（旧倉測村川浦）の鼻曲山を水源地とする烏川は、延長61.8kmで、流域のほとんど

が市域に含まれている。また、利根川河口の太平洋岸岸より100km以上離れた内陸に位置するにもかかわらず、中心市街地の標高は97.1m（高崎市役所）と低い。また、市の北部及び西部には標高1000m以上の地点も存在し、浅間隠山は東吾妻町と長野原町の境付近にあり、標高1756.7mある。高崎市内の標高差は新町の標高60mと比べて約1770mもある。

当市の地形は低く平らな台地と沖積低地、及び丘陵地からなる。この前橋・高崎方面にかけて広がる地形・地質に大きな影響を与えたのは活火山である浅間山で、群馬県の北西部の長野県境に位置し、黒斑・仏岩・前掛山・釜山の4つの火山体で構成される標高2568mの成層火山である。約21,000年前の黒斑火山の噴火では、その際の大規模な山体崩壊に伴って岩屑ながれと「応楽泥流」と呼ばれる泥流が発生している。この多量の泥流はさらに下流で堆積して前橋・高崎台地を形成した。これが前橋泥流堆積物と呼ばれている。

浅間山は、この後も多くの火山堆積物を堆積させており、代表的なもので、浅間板鼻褐色軽石群（As-BPグループ、20,000～18,000年前）、浅間大窪沢第一軽石（As-OK1、17,000年前）、浅間板鼻黄色軽石（As-YP、13,000年前）等がある。また、紀元後では4世紀初頭の浅間C軽石、1108（天仁元）年の噴火による浅間B軽石、1783（天明3）年の噴火による浅間A軽石等がある。それらはローム層や黒色土の中の鍵層として、考古学の編年を組み立てる上での重要な目安となっている。

本道跡の周辺の河川を詳しくみると、北には北群馬郡榛東村の鷹巣山を水源地とし、箕郷町東明屋付近から流れ出す井野川が南東に流れ、それに箕輪川や染谷川、天神川、大清水川、東谷川、早瀬川、唐沢川、天王川、正観寺川、一貫堀放流路、一貫堀川、それに粕川等の小河川が南流して、それぞれ井野川に合流する。南には、本郷町（旧榛名町本郷）で烏川から取水する長野堰が南東に流れ、途中で倉賀野堰、矢中堰、地獄堰に分流し、高崎市南東部で再び烏川や井野川に合流する。長野堰の開発は中世の戦国時代の箕輪城主である長野業政まで遡るともいわれるが、元々は自然河川が存在していたと考えられる。現在でも榛名町本郷の頭首工（とうしゅこう）を起点とし、延長16.4km、受益面積が約1,000haと広大で、高崎市の南東部一帯をほぼ網羅している。これらの河川

は、台地を削り込んで流域に低地を形成し、その一帯は水田地帯として利用され、一方で南東に緩やかな傾斜の台地や河岸段丘上には、縄文時代から平安時代にかけての遺跡がいくつも存在し、現在でも住宅地や畑等として利用されている。

この地域の特徴として、井野川泥流がある。これは、旧利根川の流路であったと推定される、井野川沿いの幅が広い井野川低地帯を埋めている火山泥流堆積物で、高崎泥流とも呼称されている。その起源は榛名山と考えられたが、現在分布域が西の高崎市街地寄りに広がっていることから、浅間山系と考えられている。

### 第3節 歴史的環境

この地域の歴史については、『柴崎熊野前遺跡』1998をはじめとして、既に数多くの報告書等によって詳細な記述がその後もなされており、それを参考に主として柴崎地区を中心に記述する。また時代の主要な遺跡については周辺地区をも含めて説明する。(第4図)

旧石器時代について、発掘調査例では今までに確認されていない。ただし、周辺では南東2kmに位置する岩鼻坂上北遺跡で、尖頭器文化に伴うと考えられる砂質頁岩の槍先形尖頭器が1点出土している。

縄文時代は、草創期の遺跡として、元鳥名瓦井遺跡から草創期のチャート製有茎尖頭器が1点出土している。前期では、本遺跡の西側低丘陵上に位置する柴崎村間遺跡から前期後半の諸磯式土器を伴う土坑が検出されている。中期後半から遺跡数は増大し、烏川や井野川の段丘上から集落等が検出されている。烏川左岸河岸段丘上にある倉賀野万福寺遺跡、倉賀野万福寺日遺跡で中期後半の住居が、烏川右岸段丘上の山鳥・天神遺跡、万相寺遺跡でも中期以降の住居跡が検出されている。

弥生時代は、中期後半以後の遺跡分布が知られている。烏川や井野川の河岸段丘上から集落や方形周溝墓等が検出されている。井野川左岸段丘上に位置する鈴ノ宮遺跡では後期の住居跡や方形周溝墓等が、元鳥名遺跡でも住居跡が検出されている。井野川右岸では万相寺遺跡で後期の住居跡が、高崎情報流通団地遺跡でも住居跡や方形周溝墓等が検出されており、日高遺跡のような水田経営を盤とした地域であった事がうかがえる。

古墳時代は、縄文時代や弥生時代よりも遺跡数が大幅

に増加する。古墳の数だけを見ても、1938(昭和13)年に編纂された『上毛古墳総覧』によれば、高崎南西部の当時の行政区分による京ヶ島村7基、滝川村8基、大類村18基、岩鼻村30基、倉賀野村207基、佐野村81基が数えられている。特に烏川左岸から井野川流域にかけて多数存在するが、前橋・高崎台地の微高地や河岸段丘上に存在する。

さらに、井野川流域での前期の遺跡の調査例が多く、旧高崎市域で最も古いと考えられる前方後方墳の元鳥名將軍塚古墳や、同時期の鈴ノ宮遺跡や元鳥名遺跡、下佐野遺跡等で周溝墓が検出されている。本遺跡の西の低丘陵上に存在した柴崎蟹沢古墳からは「正始元年」銘の三角縁神帳鏡をはじめ計4面の鏡が出土している。この古墳の墳丘は既に削平されており、墳形や規模がはっきりしない。同じ低丘陵上の300mほど南には砂内遺跡があり、3基の円墳が検出されている。矢中村東A遺跡では方形周溝墓2基が、矢中村東B遺跡では前方後方形の周溝墓が1基と方形周溝墓2基が、矢中村東C遺跡では方形周溝墓10基と周溝墓1基が検出されている。西浦・半人・吹手西遺跡でも方形周溝墓4基が検出されており、この丘陵は墳墓域であったと考えられる。同丘陵の北側の低地部にある柴崎遺跡群・南大類遺跡群では、古式土師器を出土した溝が検出され、この溝の一部に水留め施設が設置されていた。また、6世紀代の古墳も多く、本遺跡の南西約3kmには東日本を代表する観音山古墳があり、巨石の天井石と壁への切石の利用、多数の豪華な副葬品と特異な祭祀形式の埴輪の配置が有名である。周辺には大型の前方後円墳と小型円墳を主体とする群集墳の組み合わせからなる、綿貫・倉賀野・佐野・若宮等の古墳群も多い。(第5図)

奈良・平安時代は、10世紀ごろに編纂された『和名類聚抄(わみょうるいじゅうしょう)』によれば、古代律令制でのこの地域は、群馬郡の鳥名(しまな)郷に比定されている。本遺跡と同丘陵の西に鎮座する進雄神社は、その由緒が貞勅十一(869)年に諸国に疫病蔓延の際、清和天皇の勅遣により尾州津島神社から観請されて、代々高井氏が宮司を務める由緒ある神社である。

奈良時代については、遺構数が少なく、本遺跡の北西に近接する高崎市教育委員会が発掘調査した柴崎熊野前遺跡や、下大類遺跡、中大類金井分遺跡、上流遺跡、綿

貫遺跡、中里前遺跡で確認されている。

だが、平安時代になると遺跡数は増加する。本遺跡の他には、主な遺跡として下大類遺跡、村北A遺跡、宝昌寺裏遺跡、矢中村北B遺跡、柴崎前遺跡、西浦・吹手西遺跡、柴崎遺跡群・南大類遺跡群、中人類金井遺跡、中大類金井分遺跡、中里前遺跡が挙げられる。遺跡の約半数が微高地に位置する集落を中心とした遺跡で、柴崎熊野前遺跡、天王前遺跡、宝昌寺裏遺跡、柴崎前遺跡、矢中村北B遺跡、矢中村東遺跡、矢中村東B遺跡、下村北遺跡、矢中村西1遺跡、上流桜町北遺跡、上流5反畑遺跡、下中居条里遺跡等では、1108（天仁元）年の浅間山の噴火により噴出した浅間B軽石（As-B）で覆われた水田等が井野川低地帯に展開して検出されている。（第5図）

中世は、この地域では鎌倉時代には桓武平氏三浦氏の一族である和田氏の配下の山名氏、倉賀野氏が勢力を張っていたが、和田義盛の時に北条義時と争った霜月の乱で多くの上州勢も共に没落した。室町時代には後裔と伝えられている和田氏が、長野氏らとの婚戚関係で勢力を張っていたが、戦国時代に入ると秀でた有力な武将がいない上州は、越後の上杉氏、甲斐の武田氏、相模の北条氏の三つ巴の覇権争いの中で、諸氏が安堵を求めて大きく揺れ動いた。

本遺跡周辺には大小の城館跡や環壕宅地跡が存在する。代表的城館としては、本遺跡の北に位置する井野川右岸の大類城と大類館、そして左岸の段丘上にある元鳥名城と元鳥名内出がある。これらの城館跡も発掘調査が一部行われており、堀や掘立柱建物跡、井戸等が検出されている。南には、鳥川左岸に位置する倉賀野城や倉賀野西城、倉賀野東城等がある。これらは倉賀野氏により築造されたが、その後は上杉氏や武田氏により補強・増築された。屋敷関係では、本遺跡に近接する西側の低丘陵に、今も土塁や堀等が良好に残る大下屋敷や柴崎桜井屋敷、高井屋敷等がある。本遺跡の西の矢中地区には、長祿の戦いで武田氏に属した和田業重が窮地に陥った際に助けに馳せ参じた、秋山達般助、大沢備後、栗原内記、長嶋因幡、福島嘉兵衛、真下下野、松本九郎兵衛の七人の矢中の地侍の「矢中七騎」の屋敷が存在し、いずれも河川沿いの微高地に立地している。また、中世に長野氏が開削したと言われる長野堀が井野川低地帯を北西から南東に流れるが、その支流と共にそれぞれの屋敷の堀と

連動しており、高関屋敷、天田館、大類館、大類城、大類寄居、降照屋敷等が相当する。（第6図）

近世は、徳川家康による江戸幕府の成立により、（慶長三（1598）年に井伊直政が箕輪城に配置され、直後に交通の要衝である鳥川左岸に高崎城が建設され、高崎藩が成立する。その後は酒井・安藤・間部・松平の諸家が高崎藩主となり、明治維新に到る。1793（寛政五）年に農村復興を目的に岩鼻陣屋（代官所）が置かれている。

柴崎村の村高は「寛文郷帳」では906石うち田方734石余・畑方172石、「元禄郷帳」では936石余、「天保郷帳」と「旧高田領」ではともに977石である。

明治以後は、明治33（1900）年に市制施行、昭和2（1927）年の群馬郡塚沢村・片岡村との合併以後、周辺の群馬郡や碓氷郡の村々と合併を繰り返し、平成の大合併で、平成21（2009）年までに群馬郡群馬町・同箕郷町・同榛名町・同倉瀬村、多野郡新町・同吉井町の5町1村による市町村合併により現在に至る。

なお、近世の遺跡の大部分が、1783（天明3）年の浅間山の噴火に伴い噴出した浅間A軽石（As-A）で埋没した畠やそれを復旧するための穴等であるのも特徴である。本遺跡をはじめ、村北A・天王前遺跡、上流桜町北遺跡、上流5反畑遺跡等が挙げられる。

#### 参考文献

- （概説書・図録類）尾崎富左雄監修 1987 『日本歴史地名大系10群馬県の地名』平凡社、日本地名大辞典編纂委員会編 1988 『日本地名大辞典』10 群馬県 角川書店。
- （県町村史誌）群馬県 1938 『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第5号 群馬県史編さん委員会編 1990 『群馬県史』通史編1、1981 『群馬県史』資料編3、高崎市史編さん委員会編 1999 『新編 高崎市史』資料編1、1999 『新編 高崎市史』資料編3、『新編 高崎市史』通史編1。
- （発掘調査報告書）群馬県教育委員会編 1988 『群馬県の中世城館跡』

なお、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団と高崎市教育委員会・高崎市遺跡調査会関係の報告書は多数のため省略



## 第4節 基本土層

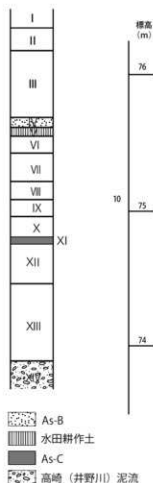
本遺跡の基本土層については、基本的に『柴崎熊野前遺跡』1998の内容を踏襲した。その内容は高崎市の井野川低地帯の南側に位置する他の遺跡と同様であるが、同地区内、遺跡内でも場所によって若干の違いがあり、今回の調査でも、その点に留意した。

5-a区其自然流路で確認されたHr-FA層やAs-C層は、西側に徐々に傾斜しており、1996（平成8）年度の発掘調査で確認された22・23号溝とは別の自然河川と考えられた。

深さも1996（平成8）年度が最も深い所で約1mであったが、今回は調査範囲の関係で傾斜の途中までしか掘削出来なかったが、それでも約2m以上であった。

## 柴崎熊野前遺跡の基本土層

- I層 灰黄褐色土 As-Aを含む。  
 II層 黄褐色土 As-AとAs-Bを含む。  
 III層 褐色土 As-Bを含む。  
 IV層 As-B層  
 V層 黒色土 水田耕作土。  
 V'層 黒色土 水田耕作土、黄色細礫を少量含む。  
 VI層 黒褐色土 しまり強く、黄色細礫を含む。  
 VI'層 黒褐色土 黄色細礫、As-Cを含む。  
 VII層 暗褐色粘質土 黄色細礫を含む。  
 VIII層 黒褐色粘質土 Hr-FA少量含む。  
 IX層 黒灰色土 きめが細かい。  
 X層 黒灰色土 As-Cを含む。  
 XI層 As-C層  
 XII層 灰褐色砂質土 鉄分を含む。  
 XIII層 灰色砂  
 XIV層 井野川泥流層



第7図 基本土層図

第4表 表層一覧表

火山・テフ ラ名	記号	年代	測定方法	堆積様式 と層相	分布・堆積	A	V	主な産物	火山ガラス タイプ	n	opx y	hp n'	模式地・その他
浅間A	As-A	A D 1783 (天明3)	H	pfa,pfl	E(S)>150km	3	4	opx,cpx,(gl)	pm	1.707-1.712	1.707-1.712		軽井沢町万山望、 碓氷峠
浅間B	As-B	AD1108 (天仁1)	H, A	pfa,sfa,afn	E>150km	3	5	opx,cpx	pm	1.524-1.532	1.708-1.710		軽井沢町万山望、 碓氷峠
榛名ニツ岳 伊香保	Hr-FF	6世紀中葉 古墳時代	A	pfa,pfl	EN>150km	4	5	ho,cpx	pm	1.501-1.504	1.707-1.711	1.672-1.677	渋川市子持黒井 塚、伊香保
榛名ニツ岳 渋川	Hr-FA	6世紀初頭 古墳時代	A	afa,pfl	E>150km	4	4	ho,cpx,cd	pm	1.500-1.502	1.707-1.711	1.671-1.695	渋川市折原
浅間C	As-C	4世紀中葉 古墳時代	A	pfa	E>150km	3	4	opx,cpx	pm	1.706-1.711	1.706-1.711		軽井沢町万山望、 碓氷峠
浅間D	As-D	4.5～5.5 古墳時代	A	pfa	E>150km	3	4	opx,cpx	pm	1.513-1.516	1.706-1.708		碓氷峠

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 遺跡の概要

本遺跡の発掘調査の対象地全域は、井野川低地帯の中の微高地から低地にかけてである。ここには下位に高崎泥流が、上位には完新世以後の土壌が堆積しており、その中には年代の鍵層となる軽石や火山灰も薄く堆積している。

今回の発掘調査による調査面は3面（部分的には2面）である。確認できた遺構・遺物は、古い順に縄文時代、古墳時代、平安時代、及び中近世に属するものである。遺構の種類としては平安時代の竪穴住居跡が中心である。遺物は縄文時代、平安時代、及び中近世のものである。調査対象表面積は約950㎡であるが、部分的に複数の文化面の調査を行なっている。

本章では時期の古い順にそれぞれ遺構の種類別に項目を設定し、個々の遺構について説明を加えた。次に、各時代毎の遺構・遺物についてその特徴を記した。

まず、縄文時代は、基本土層の第ⅩⅡ層からⅩⅢ層にかけてを確認面としたが、遺構は検出されなかった。遺物としては前期後半の諸磯b式等の土器や、打製石鏃、打製石斧、敲き石等の石器が各1点ずつ出土している。また、弥生時代の明確な遺構や遺物は確認されてなかった。平安時代以前のおそらくは古墳時代と考えられる土坑3基と溝1条が検出された。

平安時代・中近世は、北東側の微高地部分と南西側の

低地部分からなり、微高地からは平安時代の竪穴住居や江戸時代の溝8条が検出された。9世紀後半の竪穴住居は2軒が重なっており、新しい住居からはカマドが2基検出され、カマドの遣り替えがあったことが確認できた。江戸時代の溝は用水路と考えられる断面がU字型の溝がある。他に断面が稜研形状に掘られて直角に折れ曲がる屋敷の堀と考えられ溝がある。低地部分からは平安時代の水田や江戸時代の水田が検出された。このうち、平安時代の水田は天仁元年（1108）に噴火した浅間山のテフラ（浅間B軽石）に覆われていた。また、江戸時代の遺構では、天明三年（1783）に噴火した浅間山のテフラ（浅間A軽石）で埋没した水田を復旧しようと天地返しをした痕跡やその火山灰を片付けるために掘られた穴が検出された。

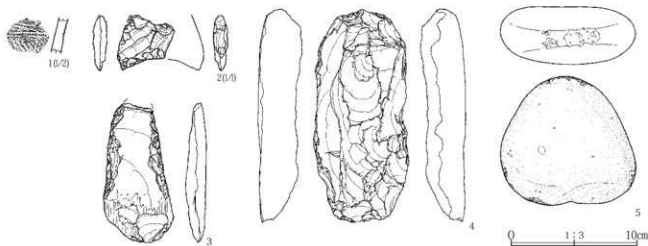
### 第2節 検出された遺構・遺物

#### （1）時代と種類

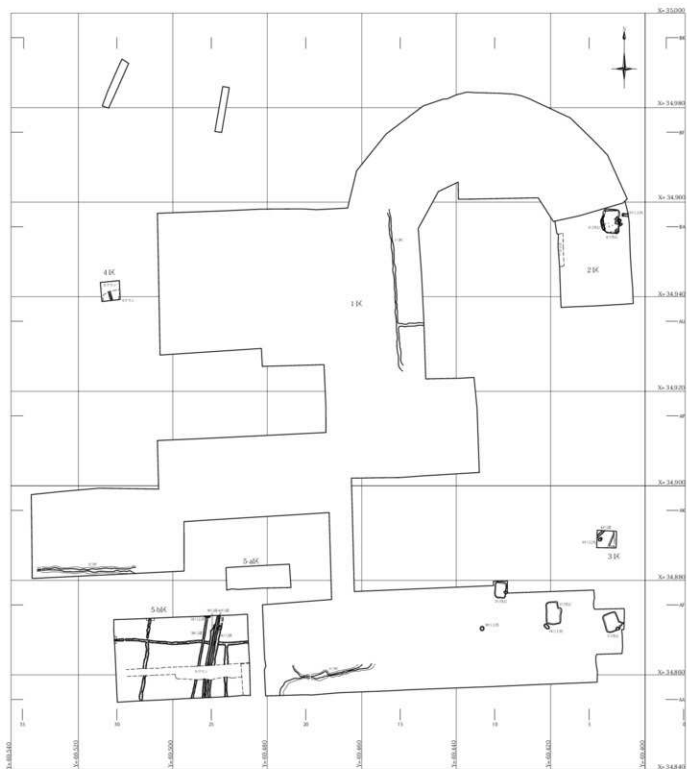
本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居2軒と溝14条、土坑3基、それに水田と復旧の痕跡が認められる高1枚、復旧穴11基からなる復旧穴群である。遺物は縄文土器、縄文石器、土師器の杯・甕、須恵器の杯・椀・壺・甕、灰釉陶器の碗、緑釉陶器、中世陶器などである。

#### 縄文時代

**縄文土器**（第8図1、PL.5）時期の判別が出来て実測可能な資料は1点だけで、前期後半の諸磯b式の深鉢の胴部である。



第8図 縄文土器・石器遺物図



第9図 平安時代遺構分布図



**縄文石器** (第8図2～5, PL. 6) 縄文石器と考えられる遺物は、打製石鏃1点と打製石斧1点、それに削器1点、それに敲き石である。黒曜石製の打製石鏃は先端と一方の基部を欠損している。灰色安山岩製の打製石斧は頭部を欠損しており、使用による刃部の摩耗が激しい。珪質頁岩製の削器は裏面が礫面の分割礫で、左側縁に刃部を作り出している。あるいは打製石斧の未成品と考えられる。粗粒輝石安山岩製の敲き石は、扁平な隅丸の三角形をしており、周縁のあちこちに敲打の痕跡がみられる。

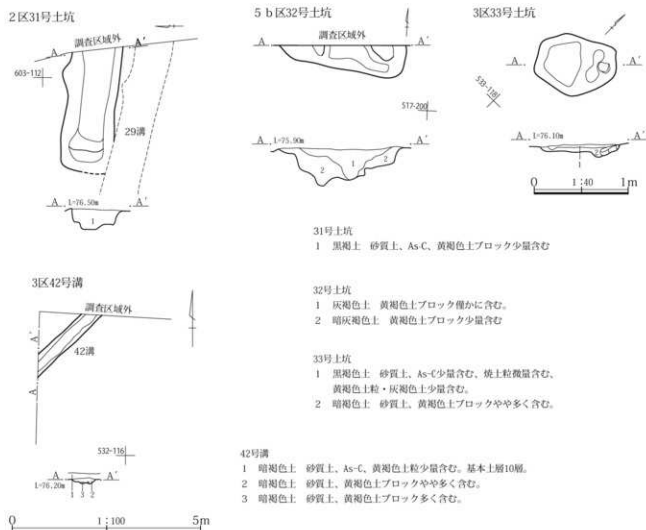
古墳時代

確認面・遺構検出面は主に基本土層の第IV層上面であり、第VI層から第X層が包含層である。検出された遺構は土坑と溝である。

**31号土坑** (第10図, PL. 1) 2区に位置する。調査区の

東に延びる長方形と考えられ、2段底である。規模は長さ(1.35)m、幅0.51m、深さ0.22mである。主軸方向はN-83°-Wで、調査範囲の東側に延びている。重複関係は29号溝とであり、中世から近世にかけての時期と考えられる29号溝が新しく、31号土坑の方が古い。土層断面図では表現されていないが、土層断面の写真(PL.1-2)で新旧関係がはっきりしている。29号溝に一部填されており、埋没土はAs-Cと黄色土ブロックを含む黒褐色土であり、時期も古墳時代と考えられる。遺物はすべて埋没土中からで、土師器・杯口縁部1点(2g)、土師器・甕口縁部4点(19g)、須恵器・碗口縁部2点(5g)である。

**32号土坑** (第10図, PL. 1) 5-b区に位置する。調査区の北に延びる長方形と考えられ、底がでこぼこである。規模は長さ(1.35)m、幅(0.34)m、深さ0.39



第10図 31・32・33号土坑、42号溝遺構図

mである。主軸方向はN-83°-Wである。重複関係は38号溝とあり、38号溝が新しく、32号土坑の方が古い。埋没土は黄色土ブロックを含む黒褐色土であり、時期もAs-Bよりも古く、古墳時代と考えられる。

**33号土坑** (第10図、PL. 1) 3区に位置する。規模は長さ0.86m、幅0.66m、深さ0.14mの楕円形である。主軸方向はN-50°-Eである。埋没土はAs-Cと黄色土を含む黒色土であり、時期も古墳時代と考えられる。

**42号溝** (第10図、PL. 1) 3区に位置する。調査範囲の北西部分に僅かに確認されただけで、規模は長さ(2.38)m、幅0.44m、深さ0.14mである。主軸方向はN-48°-Eで、両方が共に調査範囲の東側に延びている。埋没土はAs-Cと黄色土を含む黒色土であり、時期も古墳時代と考えられる。

#### 平安時代

確認面・遺構検出面は主に基本土層の第Ⅱ層下面から第Ⅲ層上面にかけてであり、第Ⅱ層が包含層である。検出された遺構は竪穴住居2軒と水田である。

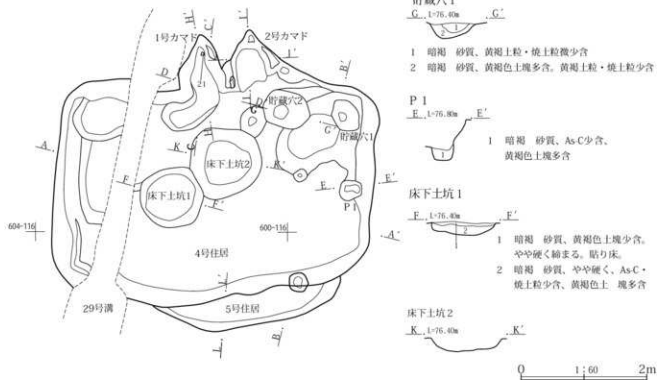
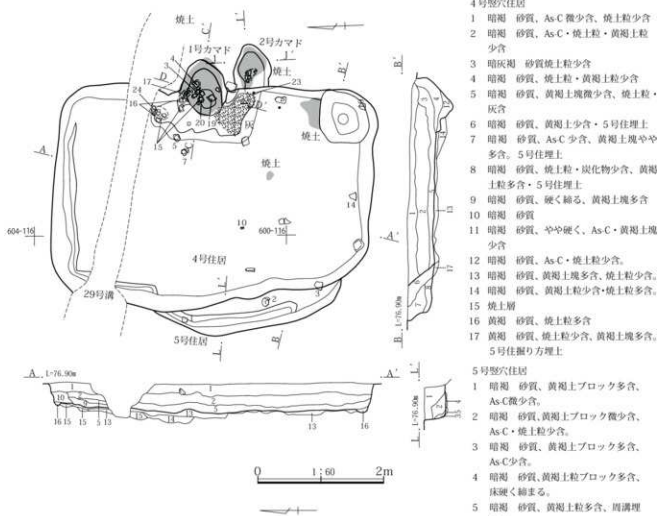
**4号竪穴住居** (第11～14図、PL. 5・6) 2区に位置する。住居の規模は長軸約5.04m、短軸約3.46mのやや隅丸の長方形に近い。面積は17.06㎡である。重複関係は5号竪穴住居とであり、4号竪穴住居が新しく、5号竪穴住居の方が古い。あるいは5号竪穴住居の拡幅か、建て替えの可能性も考えられる。また、中世から近世にかけての時期と考えられる29号溝に北寄りの部分を壊されている。遺構確認面からの深さは約40～45cmで、壁は緩やかに立ち上がる。床面は全面ではないが貼り床で固くよく締まっており、多少の凸凹を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。一部では基本土層第Ⅳ層を床としている。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは2基確認され、1号カマドは東壁の中心からやや北東側に位置する。両袖は張り出しがあまりしっかりとしていないが、残存状態は比較的良好。袖や燃焼部の構築材の一部に粘土が利用されているが、煙出し口がはっきりせず、調査当初にカマド主軸の設定を誤り、結果的に掘り方の痕跡から判断できた。天井部は完全に壊されたのか、土層からもはっきりしなかった。灰層は厚く堆積している。2号カマドは、東壁に燃焼部の手前を壊されており、想定される住居形態の東壁の中

心から南西側に位置し、むしろ南東側に近い。袖や煙道部分の構築材として一部に粘土が用いられているが、残存状態はあまり良くない。煙出し口は住居の掘り込み範囲よりも外に張り出している。床面の調査の時点で、床下土坑2基、ピット1基、それに南東隅には貯蔵穴と考えられる、楕円形の土坑が存在する。周溝は北壁から西壁の一部で確認されたが、一部は不明瞭である。また、掘り方調査時に確認された、柱穴とも考えられる小さなピットはいくつか検出されたが、位置的に上層構造想定出来る配置を満たさない。埋没土内を含めた遺物は主にカマド周辺を中心に、土師器・杯口縁部1点(5g)、土師器・高杯脚部1点(8g)、土師器・甕口縁部74点(784g)、土師器・甕胴部316点(2,094g)、土師器・甕底部5点(50g)、須恵器・椀口縁部60点(324g)、須恵器・椀体部29点(101g)、須恵器・椀底部20点(283g)、須恵器・蓋口縁部2点(12g)、須恵器・甕胴部7点(192g)、須恵器・甕頸部1点(16g)、須恵器・甕底部4点(95g)、刀子3点、礫2点(変質安山岩 3,117.6g、雲母石英片岩 268.1g)が出土している。時期は9世紀第4四半期である。

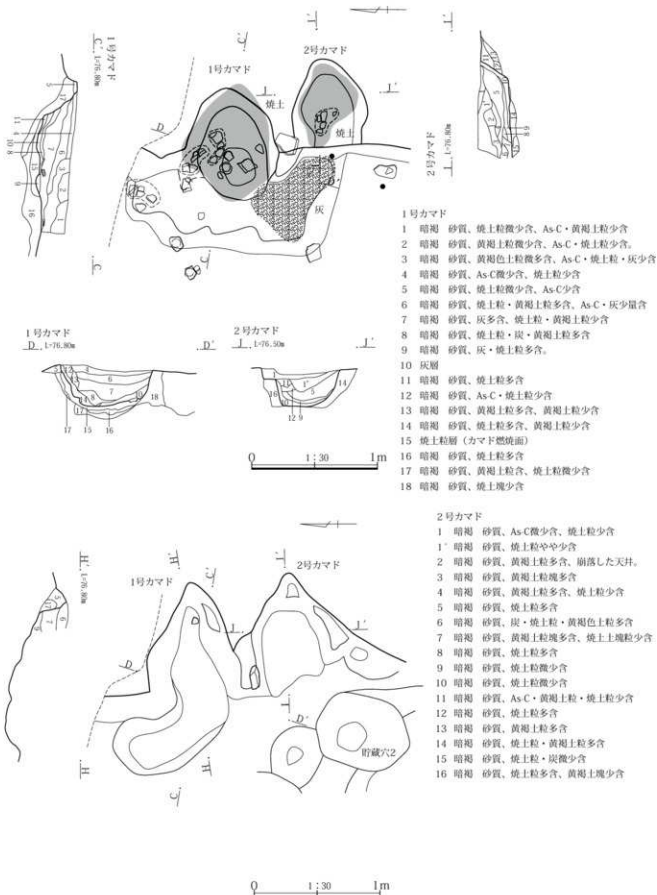
**5号竪穴住居** (第11・12・14図、PL. 2・5) 2区に位置する。重複関係は4号竪穴住居とで、4号竪穴住居が新しく、5号竪穴住居の方が古い。そのため、大部分が壊されており、南西部の一部しか残っていない。形状や住居の規模も不明である。遺構確認面からの深さは約15～20cmで、壁は緩やかに立ち上がる。床面はほぼ平坦な面をなしており、周溝は西壁の一部に確認された。埋没土は4号竪穴住居とほぼ同様に、基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。形状は残っている西壁の形状からおそらくは主軸の方が長い長方形とも想定される。カマドも北壁の中心から南東側に位置したものと想定される。掘り方調査で確認された貯蔵穴の存在からも、その考えが補強される。あるいは、4号竪穴住居の建て替えや拡幅とも考えられる。遺物は埋没土中から多く、土師器・杯20点(115.7g)・土師器・甕167点(597.6g)、須恵器・甕19点(941.6g)・須恵器・羽釜1点(30.4g)・須恵器・壺7点(87g)が出土している。時期は9世紀第4四半期である。

#### 遺物

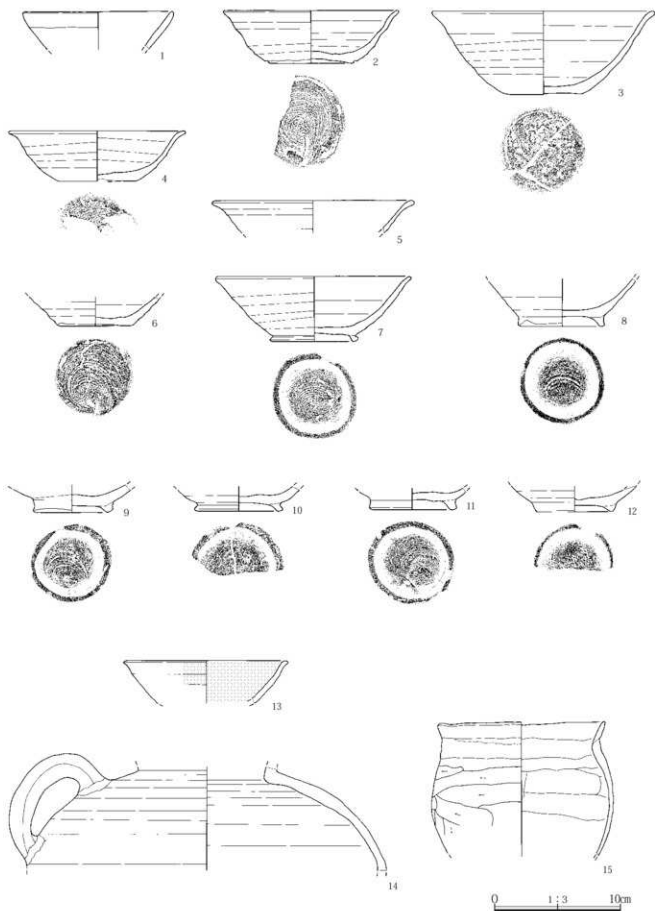
(第13～15図、PL. 5・6) 竪穴住居や土坑、溝、そ



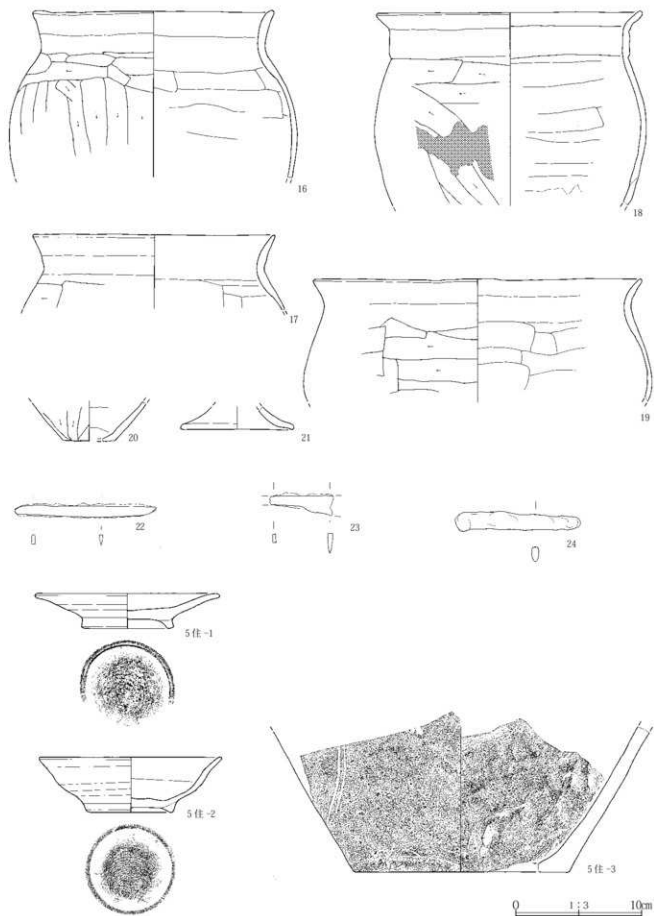
第11図 4・5号型穴住居遺構図①



第12図 4・5号竪穴住居遺構図②カマド



第13図 4号竪穴住居遺物図①



第14図 4号・5号竪穴住居遺物図②

0 1:3 10cm

れに2区、3区、5-a区、5-b区の各地区から、多数の土師器・須恵器が出土した。なお、緑釉陶器は少破片のため、写真でのみ掲載した。

### 水田

(第16・17図、PL. 3) 4区と5-b区で、直線に延びる畦と水田面が検出された。これは4区と5-a区、5-b区の地区だけに、天仁元(1108)年の浅間Bテフラ(As-B)が堆積した範囲だけ残存していたことによる。4区では北側が後世の擾乱により壊されており、南北方向に延びる4号畦と水田面が南側のみに残っているだけである。浅間Bテフラ(As-B)の堆積が約2cmである。5-b区では東西方向に長く延びる5号畦と、それに南北方向に交差する西寄りの6号畦、それに5号畦から南側に延びる7号畦が検出された。畦については、それぞれの高底等から僅かな高まりの続く部分を畦ととらえて図化した。さらに、5号畦と6号畦の交差する北側と5号畦の西側で、それぞれの畦が途切れる地点が認められたが、これがおそらくは水口と考えられた。おそらくは微高地の西側から東側への緩やかな傾斜の高底差を考えれば、その差を利用して水を循環させていたのであろうから、南西隅に位置するのが妥当と考えられる。だが、実際には水が流れたような顕著な痕跡は認められなかつ

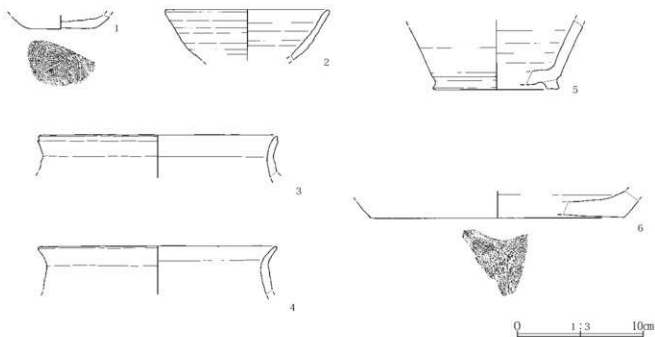
た。また、一枚の区画としてとらえられた水田はない事から、小さな区画ではない事は分かるものの、個々の面積は不明である。一方、5-a区では浅間Bテフラに覆われた面が東側に緩やかに傾斜するものの、その面が水田との確証が得られなかった。こうした点を踏まえると、同じ平安時代の遺構ではあるものの、4・5号竪穴住居が共に土器の編年の位置付けから9世紀第4四半期であるのに対して、水田は浅間Bテフラの年代である12世紀初頭である。ここから、大きく2つの時期に区分され、その間隔が最大で約200年近くになる事が分かった。

土地利用からみると、東側の微高地に竪穴住居が存在するのに対して、西側の低地部分に浅間Bテフラ下の水田が展開する形である。

### 中世

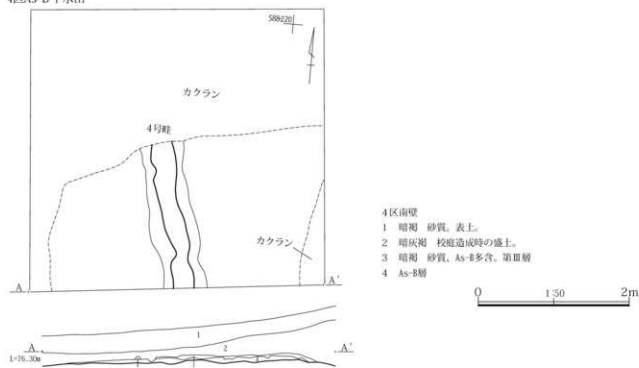
基本土層の第Ⅲ層が包含層であるが、調査確認面が近世とほとんど変わらず、特に浅間A軽石の堆積が削平されてしまった2区・3区では、遺構の埋没土に浅間A軽石が含まれるかどうかを中心に区別した。逆に、浅間B軽石の堆積が削平等で無い2区・3区では、同様に浅間B軽石が含まれるか否かで区別した。

**38号溝**(第19図、PL. 3) 5-b区に位置する。確認されている長さは(10.5)m、最大幅0.46m、最少幅0.31m、

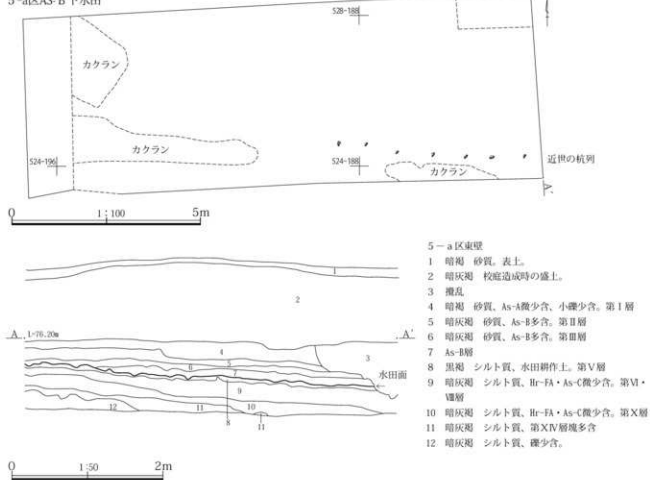


第15図 平安時代遺物図

## 4区As-B下水田



## 5-a区As-B下水田



第16図 4区・5-a区As-B水田遺構図



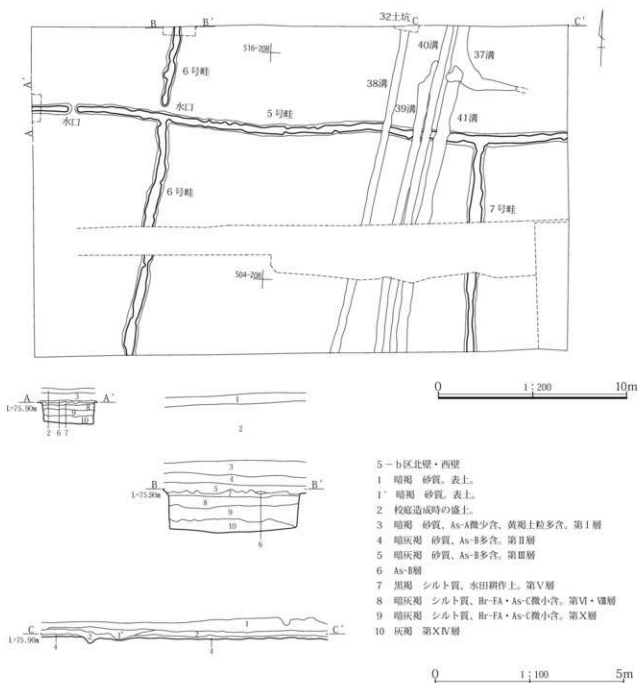
### 第3章 遺構と遺物

深さ0.15mである。重複関係は32号土坑とであり、38号溝の方が新しく、32号土坑が古い。主軸方向はN-11°-Eで、両方が共に調査範囲の北側と南側に直線に延びている。

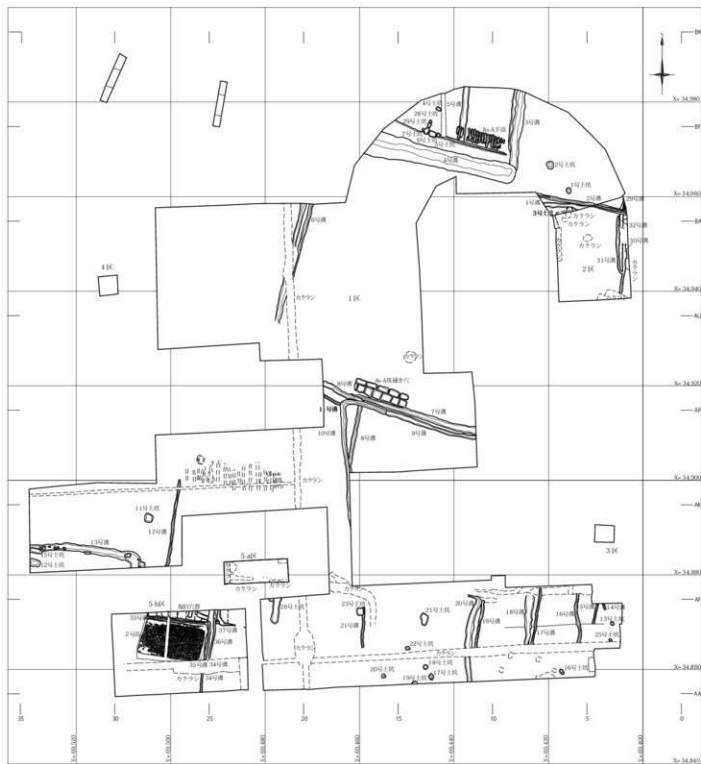
**39号溝** (第19図、PL. 3) 5-b区に位置する。確認されている長さは(15.68)m、最大幅0.67m、最少幅0.21m、深さ0.13mである。重複関係は40号溝とであり、39号溝の方が新しく、40号溝が古い。主軸方向はN-48°-Eで、南側が調査範囲の南側に延びているが、北側で無くなる。

遺物はすべて埋没土中からで、軟質陶器1点(2g)、陶器3点(48g)である。

**40号溝** (第19図、PL. 3) 5-b区に位置する。確認されている長さは(17.62)m、最大幅0.51m、最少幅0.32m、深さ0.13mである。重複関係は40号溝とであり、39号溝の方が新しく、40号溝が古い。主軸方向はN-48°-Eで、両方が共に調査範囲の北側と南側に延びている。遺物はすべて埋没土中からで、土師器・甕口縁部2点(2g)、須恵器・椀口縁部1点(4g)、軟質陶器1点(22g)、

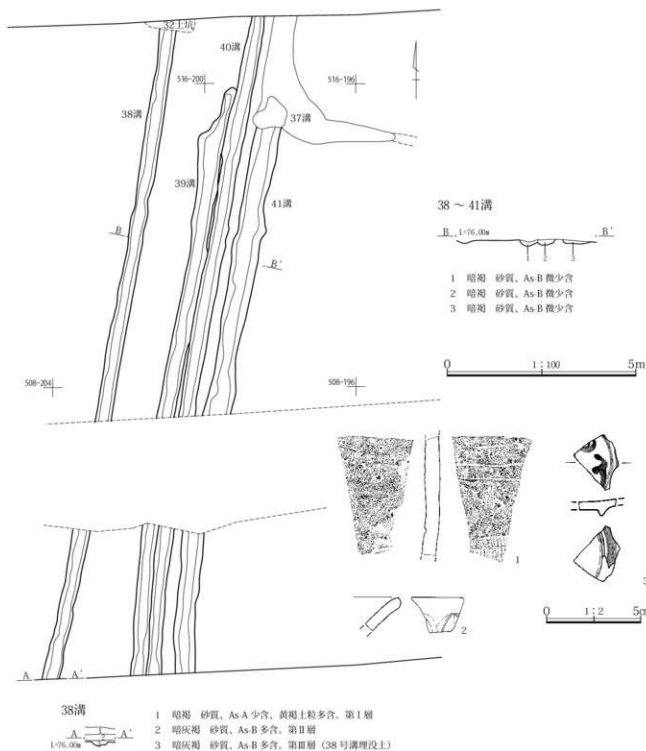


第17図 5-b区AS-B水田遺構図



0 1:800 20m

第18図 中近世遺構分布図



第19図 37・38・39・40・41号溝遺構図・中世遺物図

陶器1点(7g)である。

**41号溝**(第22図、PL. 3) 5-b区に位置する。確認されている長さは(14.82)m、最大幅0.74m、最少幅0.51m、深さ0.07mである。重複関係は37号溝とであり、37号溝の方が新しく、41号溝が古い。主軸方向はN-48°-Eで、両方が共に調査範囲の北側に延びている。遺物はすべて埋没土中からで、土師器・椀口縁部3点(7g)、

須恵器・椀口縁部1点(5g)である。

39・40・41号溝は、検出された範囲内の北側ではほぼ直線と並行だが、攪乱の範囲から南側ではやや東寄りに向きを変えている。新旧の関係では、40号溝よりも39号溝の方が新しいが、41号溝との関係は不明である。

遺物

**陶器**(第22図、PL. 6) ここで抽出して取り上げたのは、

12世紀の渥美焼と、中国・景德鎮の青磁の輪花碗の口縁部破片、それに中国・宋の染付の高台部分の破片である。

### 近世

基本土層の第II層が包含層である。調査確認面が近世とほとんど変わらず、特に天明三（1783）年の浅間A軽石（As-A）の堆積が後世に削平された2区・3区では、遺構の埋没土にAs-Aが含まれるかどうかで区別した。

#### 復旧畠

**2号畠**（第23図、PL. 3・5）5-b区に位置する。確認されている範囲は長さ13m、幅7.7mのほぼ長方形で、面積は約500㎡である。当初は、重機での浅間Bテフラの掘削中に、浅間A軽石の残りが非常に良い部分があったために、その調査を優先する事とした。浅間A軽石は一次堆積と言うよりも、むしろ下層の土と混ざり合ったような感じの二次堆積と判断し、その長方形のやや窪んだ部分のほぼ真ん中に南北方向の細いトレンチを入れて、土層の状態を観察する事とした。すると、やはり軽石と下層の土が混ざり合う形で、軽石の上に被さった様子であった。そこで、鋤等を用いて主に軽石をすくってすぐ横に逆さまに被せる天地返し作業をこの区画一面で繰り返したものと推定出来た。実際にすべての軽石を除去した後の地面に残された痕跡を見ると、現状では畝がはっきりしないものの、鋤の痕跡と見られる幅15～20cm、長さ50～20cmの長方形の窪みがびっしりと並んでいるのが見られた。こうした事例はこの時期の遺跡では見かけない事例で、むしろ同様の事例が水田遺構にはみられるのである。ただし、土壌の様子からは水田とは考えにくく、畠と想定しておく。検出されたのはこの部分だけで、単独の検出なのか、あるいは畠や旧地表面を復旧するための軽石を充填した復旧坑とセットなのかも知れない。

#### 復旧穴

**復旧穴群**（第20図、PL. 3）調査区域外に北側が伸びている大小11個の浅間A軽石（As-A）を充填した復旧穴の集合であるが、それぞれが個々に独立した形ではなく、新旧関係をもって連なっている。形状では南北に長い長方形の8基と、東西に長い大きさが異なる3基とに大きく分類される。さらに、前者はほぼ同規模の1～7号と一回り小さい11号坑に、後者は長さとも幅がそれぞれ異なる

三者三様である。この形状の違いが何に起因するかは分からない。直接の切り合い関係のない土坑同士もあるのではっきりとはしないものの、As-Aを主体に充填した埋没土の様子から、新旧関係で新しい復旧坑として1号と付けた。なお、詳細については第4章第2節でまとめた。

**29号溝**（第21図、PL. 4）2区に位置する。確認されている長さは（8.32）m、最大幅1.03m、最少幅0.71m、深さ0.52mで、形状が薬研堀で、区画溝と考えられる。主軸方向はN-77°-Wで、両方が共に調査範囲の東側と西側に伸びている。重複関係は4号竪穴住居、32号溝、それに31号土坑とであるが、土層の様子で新旧関係がはっきりしているのは29号溝が新しく、次に4号竪穴住居で、31号土坑が最も古い。32号溝との関係ははっきりしていないが、検出時の観察では浅い32号溝が新しいかと思われた。また、東側で底が一段高くなるが、北にほぼ直角に折れ曲がったように分岐して伸びていく溝を同一の区画溝と当初は想定した。だが、29号溝そのものは東にそのまますすぐ伸びているし、主軸方向から見れば32号溝の延長と考えられるが、深さが10cm異なる。また、全体図の合成作業から、1996（平成8）年度に調査した1区2号溝と同一と分かったが、遺構番号はこのままにしておいた。埋没土はAs-Aを含む砂質の暗灰褐色土が主体であるが、薄い砂が溜まった底の部分の様子から水が流れていたと考えられる。遺物はすべて埋没土中からで、土師器・杯口縁部4点（8g）、土師器・甕口縁部26点（111g）、須恵器・椀口縁部5点（31g）、須恵器・甕口縁部2点（14g）、灰軸陶器・壺1点（41g）、陶器5点（45g）である。

**30号溝**（第21図、PL. 4）2区に位置する。確認されている長さは（10.28）m、最大幅0.94m、最少幅0.41m、深さ0.1mと浅く、両縁も伸びる途中で無くなる。重複関係は31号溝とであるが、両方共に浅いために断面から判断出来ず、30号溝から31号溝がむしろ分岐しているようである。主軸方向はN-1°-Eで、両端が共に途中で無くなっている。埋没土はAs-Aを含む砂質の暗灰褐色土が主体である。遺物はすべて埋没土中からで、土師器・杯口縁部1点（2g）、土師器・甕口縁部2点（4g）、須恵器・椀口縁部1点（4g）である。

**31号溝**（第21図、PL. 4）2区に位置する。確認されて

いる長さは(12.35)m、最大幅0.82m、最少幅0.34m、深さ0.06mで浅く、北側が途中で無くなる。重複関係は30号溝とであるが、31号溝が30号溝から分岐したようである。主軸方向はN-1°-Wである。埋没土はAs-Aを含む砂質の暗灰褐色土が主体である。遺物はすべて埋没土中からで、土師器・甕口縁部4点(10g)、須恵器・椀口縁部3点(17g)、灰釉陶器・椀1点(1g)である。

**32号溝**(第21図、PL.4)2区に位置する。確認されている長さは(5.36)m、最大幅0.87m、最少幅0.64m、深さ0.14mである。主軸方向はN-1°-Wで、北は東側の調査区外に伸びており、南端は途中で無くなる。重複関係は、29号溝と31号土坑とであるが、土層の様子で新旧関係ははっきりしているのは29号溝と31号土坑で、31号土坑が古い。32号溝と29号溝との関係ははっきりしていないが、検出時の観察では浅い32号溝が新しいかと思われた。遺物はすべて埋没土中からで、土師器・甕口縁部2点(8g)、須恵器・椀口縁部1点(1g)、須恵器・甕口縁部1点(81g)である。

2区に展開する溝については、土地の区画、さらには屋敷に関係するかもしれないと考えられる29号溝と、いずれも浅い30号溝、31号溝、32号溝とでは、用途が全く異なるであろう事は理解出来るが、この3本はほぼ同じ方向に伸びており、それぞれが何らかの関係があり得るまでは想定できる。

**33号溝**(第22図、PL.4)5-b区に位置する。確認されている長さは(12.54)m、最大幅0.61m、最少幅0.4m、深さ0.09mである。主軸方向はN-83°-Wで、2号復旧田舎の北辺にほぼ並行で両端が閉じている。

**34号溝**(第22図、PL.4)5-b区に位置する。確認されている長さは(8.32)m、最大幅0.61m、最少幅0.44m、深さ0.14mである。35号溝と重複しているが、35号溝の方が新しい。主軸方向はN-8°-Eで、北側は33号溝や復旧穴の南東部分で閉じているが、南側は調査範囲の南側に伸びている。

**35号溝**(第22図、PL.4)5-b区に位置する。確認されている長さは(3.95)m、最大幅0.48m、最少幅0.35m、深さ0.07mである。重複関係は34号溝とあり、35号溝が新しく、34号溝の方が古い。主軸方向はN-11°-Eであるが、調査時に34号溝と一緒に掘ったために、両端が不明で全体も分からない。

**36号溝**(第22図、PL.4)5-b区に位置する。確認されている長さは(10.35)m、最大幅0.49m、最少幅0.28m、深さ0.04mである。主軸方向はN-2°-Eで、南側は2号畠の南東部分で閉じているが、北側は調査範囲の北側に伸びている。

**37号溝**(第22図、PL.4)5-b区に位置する。確認されている長さは(5.40)m、最大幅1.04m、最少幅0.25m、深さ0.11mである。重複関係は41号溝とであり、37号溝の方が新しく、41号溝が古い。調査区の北側ではほぼ41号溝と重なっているが、途中で約90°で東に折れ曲がっており、さらに途中で無くなる。主軸方向はN-8°-EとN-78°-Wで、両方が共に調査範囲の北側と東側に伸びている。遺物はすべて埋没土中からで、土師器・甕口縁部2点(3g)、須恵器・椀口縁部1点(2g)である。33号溝、34号溝、35号溝、36号溝、37号溝は、いずれも2号畠の北側と東側に位置し、いずれも浅間A軽石を多く含む埋没土であることから、それぞれが畠の区画、あるいは排水溝と考えられる。

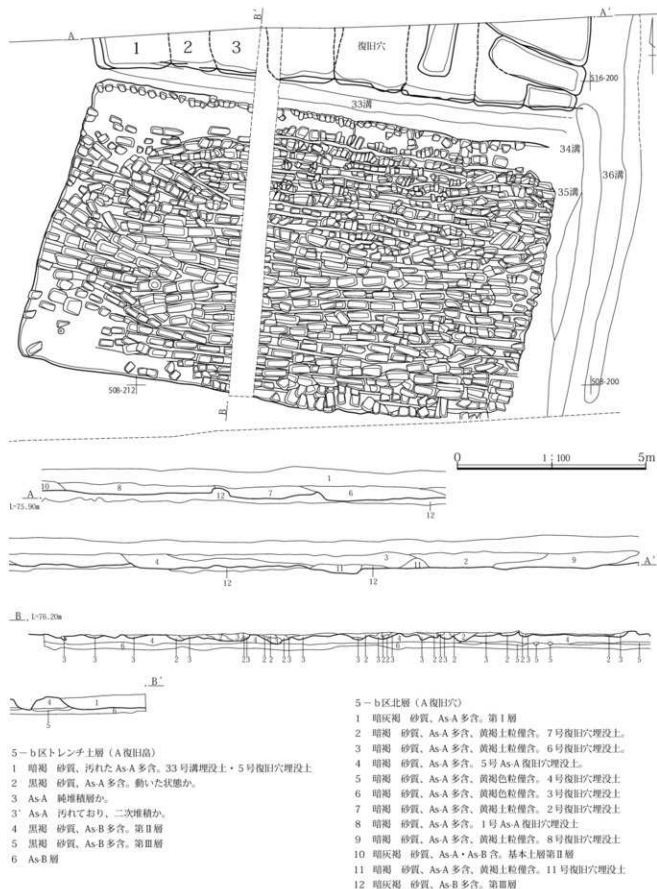
#### 遺物

遺構外からもいくつかの遺物が出土しているが、実測したのは1点の鉄製品だけである。

**鑿**(第22-1図、PL.6)完形である。5-b区のⅡ層の浅間A軽石(As-A)混土中から出土した。

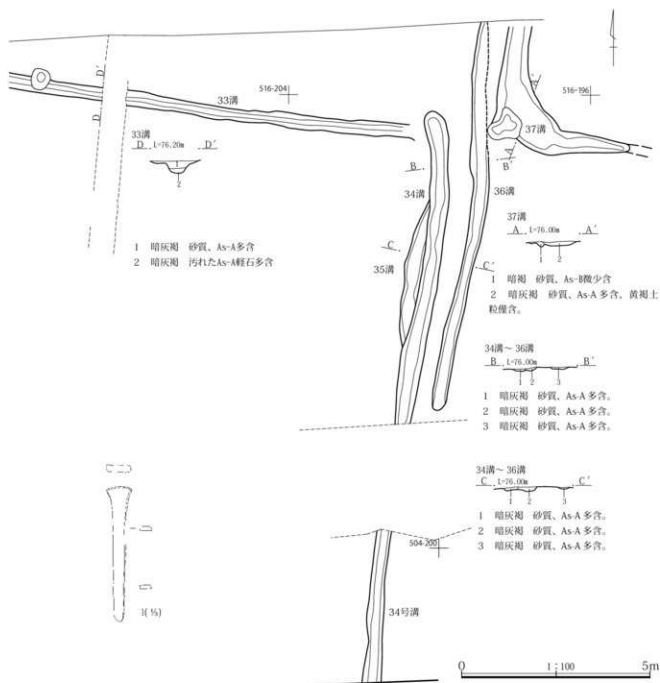
各地区での出土遺物の数量は次の通りである。

2区では、土師器・杯口縁部1点(1g)、土師器・甕口縁部10点(92g)、土師質土器1点(1g)。3区では、軟質陶器2点(14g)、陶器1点(13g)、磁器1点(1g)。4区では、遺物無し。5-a区では、土師器・杯口縁部1点(2g)、土師器・甕口縁部4点(49g)、土師器・甕口縁部4点(49g)、須恵器・椀口縁部1点(6g)、須恵器・蓋口縁部1点(19g)。5-b区では、土師器・杯口縁部1点(2g)、土師器・甕口縁部6点(67g)、須恵器・椀口縁部2点(6g)、須恵器・甕口縁部6点(64g)、軟質陶器2点(31g)、陶器8点(86g)、磁器5点(35g)。



第20図 As-A 2号復旧島、復旧穴遺構図





第22図 33・34・35・36・37号溝遺構図・近世遺物図

第5表 縄文土器・石器一覧(第8図・P.L5)

NO.	種類器種	出土位置残存率	計測値			胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	縄文土器 深盃	胴部片				粗砂、片岩/ 良好に古い期	R L横位施文で地文とし、横位集合沈線を描す。	諸磯b式	
2	縄文石器 石鏝	5-b区	長厚	1.5	幅重	1.5 0.7	円基無茎織	横位切断面にはネガティブバルブが明らかで、加撃して破損。縦位切断面は加工時の偶発的な破損?加工の最終段階で破損?	黒曜石
3	縄文石器 打製石斧	2区4号整穴住居覆土	長厚	11.0	幅重	5.5 112.3	短冊型	完成状態。対部摩耗は顕著。両側縁は潰れ。対部表裏面の薄い剥離痕は対部再生を試みたものか、使用時の破損か明らかでない。	灰色安山岩
4	縄文石器 器形	5-a区	長厚	16.7	幅重	7.6 514.8	幅広薄片	右側縁は表裏面を粗く剥離。石斧様の側縁を形成しているが、左側縁は裏面側面から粗く剥離。薄い対部を作出している。	珉質頁岩
5	縄文石器 敲石	2区4号整穴住居覆土	長厚	10.2	幅重	10.7 682.0	扁平磯	三角形状を呈する磯・小口部3ヶ所に打痕。	粗粒輝石安山岩



遺物観察表

第6表 2区4号竪穴住居一覽 (第13・14圖 PL.5・6)

NO.	種類器種	出土位置残存率	計測値		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	土師器 杯	口縁部片	口	11.6		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部はナデ。	
2	須恵器 椀	1/4	口底	13.6 6.7	高 4.2	細砂粒・角閃/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
3	須恵器 椀	1/2	口底	17.4 6.4	高 6.7	粗砂粒/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り。高台が貼付されていた可能性あり。	
4	須恵器 椀	1/4	口底	13.6 6.0	高 4.0	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
5	須恵器 椀	口縁部片	口	15.6		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
6	須恵器 椀	底部～体部片	底	6.0		細砂粒・角閃/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
7	須恵器 椀	3/4	口底	15.2 6.6	高 5.2	細砂粒/還元焰/淡黄	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転系切り。	
8	須恵器 椀	底部～体部下片	底	6.7		細砂粒・褐色粒/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転系切り。	
9	須恵器 椀	底部	底	6.2		細砂粒/還元焰/褐灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転系切り。	
10	須恵器 椀	底部片	底	6.5		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。高台は貼付、底部切り難し技法は高台貼付時のナデで不明。	
11	須恵器 椀	底部	底	6.8		粗砂粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転系切り。	
12	須恵器 椀	底部	底	6.7		細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部切り難し技法は高台貼付時のナデで不明。	
13	灰輪陶器 椀	口縁部片	口	12.6		夾雑物無/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。焦輪は外面口縁部、内面は全面、焦輪方法小片のため不明。	
14	須恵器 手付瓶	胴部上位片	頸	11.0		細砂粒・白色粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。把手は貼付、外面胴部に隣付着。	
15	土師器 小型甕	口縁部～胴部上片	口	13.1		細砂粒/良好/にぶい橙	頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。内面胴部はヘラナデ。	
16	土師器 小型甕	口縁部～胴部上片	口	18.8		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。内面胴部はヘラナデ。	
17	土師器 甕	口縁部～胴部上片	口	19.6		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。内面胴部はヘラナデ。	
18	土師器 甕	口縁部～胴部上片	口	20.6		細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。内面胴部はヘラナデ。	
19	土師器 甕	口縁部～胴部上片	口	25.8		細砂粒/良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。内面胴部はヘラナデ。	
20	土師器 甕	底部片	底	4.2		細砂粒/良好/にぶい相黄	胴部と底部はヘラナデ。内面はヘラナデ。	
21	土師器 台付甕	脚部片	脚	9.0		細砂粒/良好/にぶい橙	脚部は横ナデ。	
22	鉄器 刀子	完形	長厚	11.3 0.3	幅重 1.3 12.2		錆び跡が激しく、原形を復元することが難しい。金属鉄はほとんど残存していない。明瞭な関節の形状は確認できないが、断面形状から刀身約8cm、茎約3cmと推測される。	埋没土
23	鉄器 刀子	関節辺片	長厚	5.1 0.3	幅重 1.9 6.0		関節周辺。刀身幅1.85cm、茎幅0.7cm。錆化著しく、金属鉄はほとんど残存していない。	
24	鉄器 刀子	刀身部か	長厚	10.0 0.6	幅重 1.5 17.0		錆び跡が激しく、原形を復元することが難しい。金属鉄はほとんど残存していない。断面形状から刀子の刀身部と推測した。左端が関節周辺か。	

第7表 2区5号竪穴住居一覽 (第14圖 PL.6)

NO.	種類器種	出土位置残存率	計測値		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 皿	2/3	口底	14.2 7.2	高 2.8	粗砂粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転系切り。
2	須恵器 椀	3/4	口底	14.4 7.3	高 5.4	粗砂粒・片岩/還元焰/オレンジ	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転系切り。
3	須恵器 椀	胴部下片	底	17.0		粗砂粒/還元焰/灰	外面胴部はヘラナデ、内面もヘラナデであるが、かすかにアテ負痕が残る。

第8表 平安時代遺物一覽 (第15圖)

NO.	種類器種	出土位置残存率	計測値		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	須恵器 杯	底部片	底	5.4		細砂粒・白色粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転系切り無調整。	5-6区As-B下水田 耕土。
2	須恵器 椀	口縁部～体部片	口	12.8		細砂粒・白色粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。	5-6区As-B下 黒土。
3	土師器 椀	口縁部片	口	18.8		細砂粒/良好/橙	口縁部は内外とも横ナデ、口唇部に内線が1条通る。	2区31号土坑埋 没土。

NO.	種類器種	出土位置残存率	計測値		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
4	土師器 標	口縁部片	口	18.8		細砂粒/良好/赤い橙	口縁部は内外とも横ナデ。
5	須恵器 長頸壺	底部～胴部下位 片	底	10.0		細砂粒/還元焼/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラ削り。
6	須恵器 標	底部片	底	20.0		微砂粒/還元焼/橙	ロクロ整形、回転方向不明。底部はヘラナデ。

第9表 中世遺物一覧(第19図 PL.6)

NO.	種類器種	出土位置残存率	計測値		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	陶器 標	胴部小片				粗砂粒/還元焼/灰	外面に叩き痕がわずかに残る。内面はヘラナデ。外面に降灰が付着。
2	龍泉窯系 青磁碗	口縁部片				灰白	外面坑窪蓮弁文。
3	陶器 標	底部片				白	内面2重圈線文に染付。高台輪染付2重圈。

第10表 近世遺物一覧(第22図)

NO.	種類器種	出土位置残存率	計測値		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	鉄器 盤	完形	長厚	16.1 0.5	幅 1.1 ～3.0 64.5		鍛造品。頭部弧状、先端部は両刃。錆化は表面のみで、金属鉄がほとんど残存している。

## 第4章 まとめ

### 第1節 水田

本遺跡では、天仁元年(1108)の浅間B軽石に覆われた水田が検出された。これは1973年に調査された高崎市下小島遺跡で検出されて以来、浅間山の東に位置する安中市や高崎市、それに前橋市にかけての地域では一般的で、北は渋川市、南は富岡市から藤岡市まで広がっている。本遺跡周辺でも第5図と第7図とを比較して分かるように、台地や微高地との境の際までの低地部分が水田に利用されているのが、遺跡の分布状況で分かっている。だが、条里制の問題では周囲の柴崎遺跡群や矢中遺跡群で大甍が検出されているが、本遺跡では検出されなかった。おそらくは水田地域の縁部に位置するためであろう。一方、浅間A軽石の時には高が存在していた事が分かっているので、これは軽石が混入した耕土の問題で、浅間B軽石降下後は水田地帯が復旧出来ずに畑作に切り替わったままで、再び水田化するには、近年の用水整備と圃場整備を待たなければならなかったと言える。

### 第2節 復旧田・復旧穴

天明三年(1708)の大噴火とそれに伴う多量の火山噴出物は、火山灰や軽石として過去の噴火時と同様に東側の地域に降り積もり、多くの村落や田畠を覆い尽くし

た。特に、浅間B軽石よりも南北にやや広い範囲に被害を及ぼし、南は甘楽町から藤岡市、北は長野原町や東吾妻町まで及んでいる。1980年代から高崎市や前橋市を中心に多くの遺跡の発掘が進められている。

一方、北西の裾野を中心に岩屑なだれ、火砕流が流れ下り、さらには吾妻川に流れ込んで泥流となり、下流で合流する利根川の兩岸周辺の村落や田畠を覆い尽くし、あるいは押し流したりした。その被害は吾妻郡嬭恋村から伊勢崎市周辺にまで及んでいる。1983年に発掘された渋川市中村遺跡では約2mもの厚さの泥流に覆われた水田と畠が検出され、その後も長野原町や玉村町を中心に数多くの遺跡が発掘されている。

本遺跡でも、前回の調査で畠と灰掻き穴(復旧穴)、今回も復旧田と復旧穴が検出されている。そこで、復旧田と復旧穴についてまとめる事とする。なお、関連して復旧水田についても関連する部分について記述する。

前記した地域では、災害からの復旧のための作業が被災直後から開始された所もあるが、文献によれば数か月から数年も要した。各地で検出された遺構がすべてその期間中に残されたものかどうかは不明だが、土地の区画を踏襲したりしている場合が多いので、おそらくは大半がそうだと考えられる。中には7月中旬の浅間山の最初の噴火から8月4日の大噴火までの約半月の期間中に、水田や畠に降った軽石を除去したり、耕土に働き込んだりする事で、早急な復旧を図ろうとした事例もあっ

たとえられる。

たとえば、長野原町の中欄Ⅱ遺跡での関俊明氏の観察では、吾妻地区でのこの時期に「土用の培土」と呼ばれる、作物のある畝の上に畝間の土を「1番ザク」や「2番ザク」として盛り上げる作業で、その際に薄く降り積もっていた軽石をも一緒に盛ったとしている。同様に、軽石を踏み込む事で復旧しようとしたのが、長方形の区画の中に、鋤の痕跡と見られる幅20～15cm、長さ50～20cmの長方形の窪みがびっしりと並ぶ本遺跡の事例であり、地形と土壌から発掘調査中は復旧品としたが、同様の事例は畝には少なく、むしろ水田での同様の鋤痕が検出されている事例が多く、高崎市の上流榎町北遺跡、上流五反畑遺跡、宿横手三波川遺跡、萩原田地遺跡、東町V遺跡、真町I遺跡、栄町I遺跡、岩押I遺跡、下之城村東遺跡、石原霞田遺跡等で検出されており、『東町V遺跡』の報告書で黒田晃氏によりまとめられているが、今後も同様の事例の検討を通じての課題としたい。

また、大規模な軽石の処理としては、「灰掻き山」、「灰掻き穴」、「復旧溝」、「復旧穴」等がある。「灰掻き山」は文字通り土地の一部に軽石等を積み上げて処理する、ただしその部分が利用できない不具合も生じる。甘菜町の天引向原遺跡では、2ヶ所の「灰かき山」の1つの下から、軽石で埋没した畝が検出された。これも畝の一部を潰してでも、復旧を図ろうとした痕跡である。高崎市内でも、田畑の間に積み上げて砂山としたために、耕作面積が1割以上減少したとの記録が残されている。こうした砂山はあちこちに存在したようで、上小崎町の「石尊山」や南大類町、貝沢町での存在が高崎市史民俗部会による聞き取り調査で判明している。だが、昭和40年代の圃場整備関連の道路工事で利用される等して、ほとんどが無くなったそうである。一方、「灰掻き穴」、「復旧溝」、「復旧穴」と名称も様々だが、実態は同一の方法であり、ここでは復旧穴に統一して記述する。文字通り穴を掘って火山灰や軽石を片付ける事例は、利根川流域に面する遺跡で数多く見られ、多量の泥流、特に礫の処理には適している。では、実際の復旧の方法はどうだったのか。2008年の長野原町の西宮遺跡の発掘で、町内では初めての浅間A軽石の復旧穴が検出されたが、それは長方形の細長い穴を掘り、その中に礫や軽石等を挿き入れて処理する方法で、横に移動しながら連続して長細い溝

状の穴の掘削と埋戻しを繰り返す事で、最終的にはまるで幅の細い畝と幅広い畝間(サク)が連続するように見えるので、畝と分類される事例もある。こうした事例は、前橋市や高崎市、玉村町で多く見られるものと同じであり、天明年間以前の寛保二年(1742)の洪水の際にも、玉村町の福島曲戸遺跡で同様の作業が行われており、少なくとも古い時期からの工法と言える。この中には、軽石や礫の処理だけでなく、下層の耕作に適した土と入れ替える目的で深く掘り込んだ、いわゆる「天地返し」が行われた痕跡も認められる。

この他に、山からの転石等の処理としては、長野原町の下原Ⅱ遺跡の調査時点では「集石」の土坑としたが、実際には耕作に邪魔な礫を埋め込んで、その上に土を被せて畝とした痕跡と考えられる。また、長野原町の横壁中村遺跡や東吾妻町の上野原遺跡等では、畝の隅や道の際を利用して邪魔な石を積み上げた、「やっくら」と呼ばれる石山があちこちに点在する。これは露出している石が多量な時や、元々が石の多い土壌で埋め込むのが難しい土地等で行われた対処方法で、土地の一部を無駄にはしてしまうが、多量の石を片付けるには仕方がなかったと言える。

最後に、屋敷等は大部分が高台に移転する事で復興が図られてたり、埋没後も災害以前と同様の配置での道や土地区画が復元されている事例等、この他にも記述すべき事項が多くあるものの、スペースの関係で、改めて別稿で述べたい。

参考文献(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団は群埋文に省略)

- 能登健・小島敦子「群馬県の水田・畝調査遺跡集成」『研究紀要』14、群埋文、83-102、1997  
 能登健「関東地方のはたけ—火山灰に埋まった畝・畑の調査—」『はたけの考古学』26-155、2000  
 谷藤保彦「天明三年浅間山噴火後の耕地復旧について—高崎市上滝町周辺の遺跡調査から—」『研究紀要』20、群埋文、27-42、2002  
 中島直樹「1783 上野の田畑」菊池徹夫編『比較考古学の新地平』130-140、2010  
 黒田晃「第5章 天明三年浅間山噴火と災害復旧について」『東町V遺跡』41-44、1996  
 関俊明「久々戸遺跡・中欄Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」群埋文、2003  
 関俊明「浅間山噴火の爪痕—天明三年浅間山噴火遺跡」,新泉社、2010



5-a区東壁土層 (西から)



31号土坑セクション・全景 (西から)



32号土坑セクション・全景 (南から)



33号土坑セクション (南東から)



42号溝セクション (東から)



42号溝全景 (北から)



4号竪穴住居セクションA-A' (南から)



4号竪穴住居遺物出土状態 (西から)



4号竪穴住居1号カマドセクションC-C' (南から)



4号竪穴住居1号カマド全景 (西から)



4号竪穴住居2号カマドセクション1-1' (南から)



4号竪穴住居2号カマド全景 (西から)



4号竪穴住居1号カマド掘り方セクションC-C' (南から)



4号竪穴住居1号・2号カマド掘り方全景 (西から)



5号竪穴住居セクションL-L' (東から)



4・5号竪穴住居掘り方全景 (南から)



4区As-B下水田全景（北から）



5-a区As-B下水田全景（西から）



5-b区As-B下水田近景（東から）



38・39・40・41号溝全景（南から）



5-b区As-A復旧2号畠・復旧穴群全景（東から）



5-b区As-A復旧2号畠セクション（東から）



5-b区As-A復旧2号畠・雑跡（東から）



5-b区As-A復旧穴群・33号溝全景（南東から）



29号溝全景（西から）



30・32号溝全景（南から）



34・35・36号溝全景（南から）



37号溝全景（南東から）



2区土置き場（北西から）



2区道構確認作業（南西から）



2区道構実測作業（北から）



3区人力による掘削（北から）



4区人力による掘削（南東から）



5-a区遺構確認作業（東から）



5-b区遺構確認作業（東から）



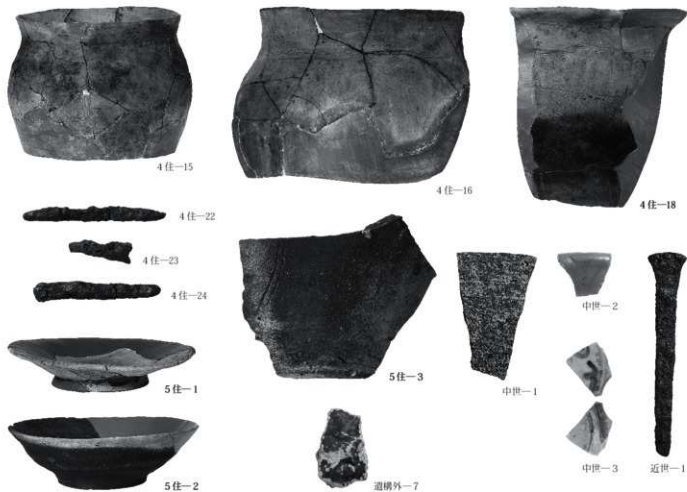
5-b区As-A復旧2号品検出作業（南から）



縄文時代、平安時代出土遺物

4住-14





平安時代、中近世出土遺物

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第513集

## 柴崎熊野前遺跡 II

県立高崎高等養護学校校舎棟等増築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年(2011)1月14日 印刷

平成23年(2011)1月21日 発行

編集・発行/財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2

電話 (0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/株式会社 開文社印刷所